

第6回  
学習指導基本調査  
DATA BOOK

高校版

—学校・教員を対象に—

ベネッセ教育総合研究所

# 調査概要

- 調査テーマ 小学校・中学校・高校における学習指導の実態と教員の意識
- 調査方法 郵送法による質問紙調査
- 調査時期 2016年8月～9月
- 調査対象 全国の公立の小学校・中学校、公立・私立の高等学校(全学科)の校長および教員

学校区分	小学校		中学校		高校			
	公立		公立		公立		私立	
設置区分	公立		公立		公立		私立	
対象者	校長	教員	校長	教員	校長	教員	校長	教員
配布数	2,000	12,000	2,000	12,000	2,000	12,000	675	4,050
有効回収数	637	3,289	725	3,689	1,110	6,436	311	1,887
回収率	31.9%	27.4%	36.3%	30.7%	55.5%	53.6%	46.1%	46.6%

※ 抽出方法・条件…全国の公立小・中学校のリストおよび公立・私立の高校のリストより、都道府県の教員数に応じた抽出確率で無作為に学校を抽出。教員調査は、年齢、性別、担当学年、担当教科を考慮した各学校6名の教員の抽出を校長に依頼した。小学校は、学級担任をしている教員、中学校は、国語・社会・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員、高校は、国語・地理歴史・公民・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員を対象としている。

## ● 調査の枠組み

	調査方法	調査時期	調査地域	校長調査				教員調査			
				小学校	中学校	高校		小学校	中学校	高校	
				公立	公立	公立	私立	公立	公立	公立	私立
97年調査 (第1回調査)	郵送法による質問紙調査 教職員名簿をもとにした 系統抽出(無作為)	1997年12月 ～1998年1月	6地域						938名		
98年調査 (第2回調査)		1998年10月 ～11月						1,033名			
02年調査 (第3回調査)	学校通しによる質問紙調査 地域類型別構成を考慮した 割り当て法	2002年9月 ～10月	14地域	642名	603名			3,468名	2,891名		
07年調査 (第4回調査)	郵送法による質問紙調査	2007年8月 ～9月	全国	528名	559名			1,872名	2,109名		
10年調査 (第5回調査)		2010年8月 ～9月	全国	560名	573名	830名		2,688名	2,827名	4,791名	
16年調査 (第6回調査)		2016年8月 ～9月	全国	637名	725名	1,110名	311名	3,289名	3,689名	6,436名	1,887名

※07年・10年・16年調査との比較のため、97年・98年・02年調査は、得られたサンプルのうち、小学校は学級担任をしている教員に、中学校は国語・社会・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員に限定して分析を行っている。

※02年・07年の校長調査には、副校長、教頭、教務事項に詳しい教員の回答も含まれている。

### ◆ 調査結果を読み取る際の注意点

- ・02年調査までの調査方法・調査地域は07年調査以降のものと異なるため、経年データを解釈する際に考慮する必要がある。
- ・図表において、有効回収数すべてを集計対象としている場合は、人数を示していない。
- ・図表で使用している百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。
- ・10年の高校の教員調査は、有効回答数4,791名のうち、校長調査とマッチング可能な3,070名を分析対象としている(詳細は第5回報告書(高校版)を参照のこと)。

## CONTENTS

<b>1 指導に対する意識</b>	<b>5 進路指導・大学入試改革</b>
1-1 教員の指導観 …………… 6	5-1 進路指導 …………… 26
1-2 児童・生徒に身につけている力 …………… 10	5-2 大学入試改革 …………… 28
1-3 児童・生徒に身につけさせたい力 …………… 12	<b>6 指導力向上</b>
<b>2 授業</b>	6-1 校内研修 …………… 30
2-1 心がけている授業方法 …………… 14	6-2 指導力向上 …………… 31
2-2 心がけている授業時間の使い方 …………… 17	<b>7 教員の勤務実態と意識</b>
2-3 ICT機器を活用した授業 …………… 18	7-1 教員の勤務時間 …………… 32
2-4 探究学習 …………… 20	7-2 教員の悩み …………… 34
<b>3 家庭学習の指導</b>	7-3 児童・生徒の様子・変化 …………… 35
3-1 宿題 …………… 23	7-4 教員の満足度 …………… 36
3-2 学習計画の指導 …………… 24	<b>8 教育改革への賛否</b>
<b>4 グローバル化に向けた取り組み</b>	8 教育改革への賛否 …………… 37
4-1 グローバル化への対応 …………… 25	資料 教育環境の変化 …………… 38

# 基本属性

## 学校属性 (校長票)

### ● 地域

		北海道	東北	北関東	南関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄	計
小学校	人数	25	53	50	152	106	92	47	28	84	637
	%	3.9	8.3	7.8	23.9	16.6	14.4	7.4	4.4	13.2	100.0
中学校	人数	35	76	55	143	136	118	48	24	90	725
	%	4.8	10.5	7.6	19.7	18.8	16.3	6.6	3.3	12.4	100.0
高校 (公立)	人数	50	115	91	206	229	157	81	44	137	1,110
	%	4.5	10.4	8.2	18.6	20.6	14.1	7.3	4.0	12.3	100.0
高校 (私立)	人数	7	15	14	104	47	55	22	8	39	311
	%	2.3	4.8	4.5	33.4	15.1	17.7	7.1	2.6	12.5	100.0

注) 北関東は、茨城県・栃木県・群馬県、南関東は、埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県。

<参考> 文部科学省「学校基本調査(平成28年度)」

(%)

		北海道	東北	北関東	南関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄	計
小学校		5.4	9.6	6.0	18.9	17.4	16.1	7.6	4.5	14.6	100.0
中学校		6.3	10.1	5.7	19.2	16.8	15.4	7.4	4.3	14.8	100.0
高校(公立)		6.6	10.6	6.4	17.7	18.0	15.6	7.6	4.3	13.0	100.0
高校(私立)		3.9	6.5	3.9	31.6	13.9	17.9	7.3	2.6	12.5	100.0

注) 全て公立(本校)の値。小学校は義務教育学校を、中学校は義務教育学校と中等教育学校を、高校は中等教育学校を含めている。

### ● 学級数

		1～6学級	7～12学級	13～18学級	19～24学級	25学級以上	無回答・不明	計
小学校	人数	106	213	174	82	62	0	637
	%	16.6	33.4	27.3	12.9	9.7	0.0	100.0
中学校	人数	158	242	205	89	31	0	725
	%	21.8	33.4	28.3	12.3	4.3	0.0	100.0
高校 (公立)	人数	62	192	364	366	125	1	1,110
	%	5.6	17.3	32.8	33.0	11.3	0.1	100.0
高校 (私立)	人数	8	33	61	61	148	0	311
	%	2.6	10.6	19.6	19.6	47.6	0	100.0

注) 数値は、校長と教員の回答から特定した。

### ● 学科(高校)

		普通科	総合学科	専門学科	その他	無回答・不明	計
高校 (公立)	人数	775	90	212	8	25	1,110
	%	69.8	8.1	19.1	0.7	2.3	100.0
高校 (私立)	人数	282	1	7	4	17	311
	%	90.7	0.3	2.3	1.3	5.5	100.0

注1) 普通科には理数科、外国語科を含む

注2) ここで「学科」とは、設置学科のうちもっとも募集定員が多い学科を指す。専門学科には工業・商業・水産・看護等を含む。

### ● 入学時の学力水準(高校)

「入学時の学力水準」は、「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績(評定平均)」に対する校長の回答にもとづいて分類した。

		Aグループ (4.5～5.0点)	Bグループ (3.5～4.0点)	Cグループ (3.0点)	Dグループ (1.0～2.5点)	無回答・不明	計
高校 (公立)	人数	72	437	302	209	90	1,110
	%	6.5	39.4	27.2	18.8	8.1	100.0
高校 (私立)	人数	14	146	91	43	17	311
	%	4.5	46.9	29.3	13.8	5.5	100.0

# 基本属性

## 教員属性(教員票)

教員調査は、年齢、性別、担当学年、担当教科を考慮した各学校6名の教員の抽出を校長に依頼した。そのため、教員の構成比は、母集団の構成比を必ずしも反映しているわけではない。

### ●年齢

		25歳以下	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61歳以上	無回答・不明	計
小学校	人数	201	392	877	938	817	13	51	3,289
	%	6.1	11.9	26.7	28.5	24.8	0.4	1.6	100.0
中学校	人数	288	615	933	952	836	23	42	3,689
	%	7.8	16.7	25.3	25.8	22.7	0.6	1.1	100.0
高校 (公立)	人数	324	782	1414	1809	1936	71	100	6,436
	%	5.0	12.2	22.0	28.1	30.1	1.1	1.6	100.0
高校 (私立)	人数	84	205	610	548	386	39	15	1,887
	%	4.5	10.9	32.3	29.0	20.5	2.1	0.8	100.0

### ◇高校教員の年齢層別経年比較(公立)



注)年齢のみ前回調査時からの変化が大きいため、経年で示している。

### ●性別

		女性	男性	無回答・不明	計
小学校	人数	2,059	1,227	3	3,289
	%	62.6	37.3	0.1	100.0
中学校	人数	1,404	2,276	9	3,689
	%	38.1	61.7	0.2	100.0
高校 (公立)	人数	2,003	4,416	17	6,436
	%	31.1	68.6	0.3	100.0
高校 (私立)	人数	497	1,387	3	1,887
	%	26.3	73.5	0.2	100.0

### ●担任をしている学年(高校)

		1年生	2年生	3年生	学級担任をしていない	無回答・不明	計
高校 (公立)	人数	1,615	1,750	1,687	1,297	87	6,436
	%	25.1	27.2	26.2	20.2	1.4	100.0
高校 (私立)	人数	521	504	512	313	37	1,887
	%	27.6	26.7	27.1	16.6	2.0	100.0

注)各学年の値は、副担任も含む。

### ●担当教科別(高校)

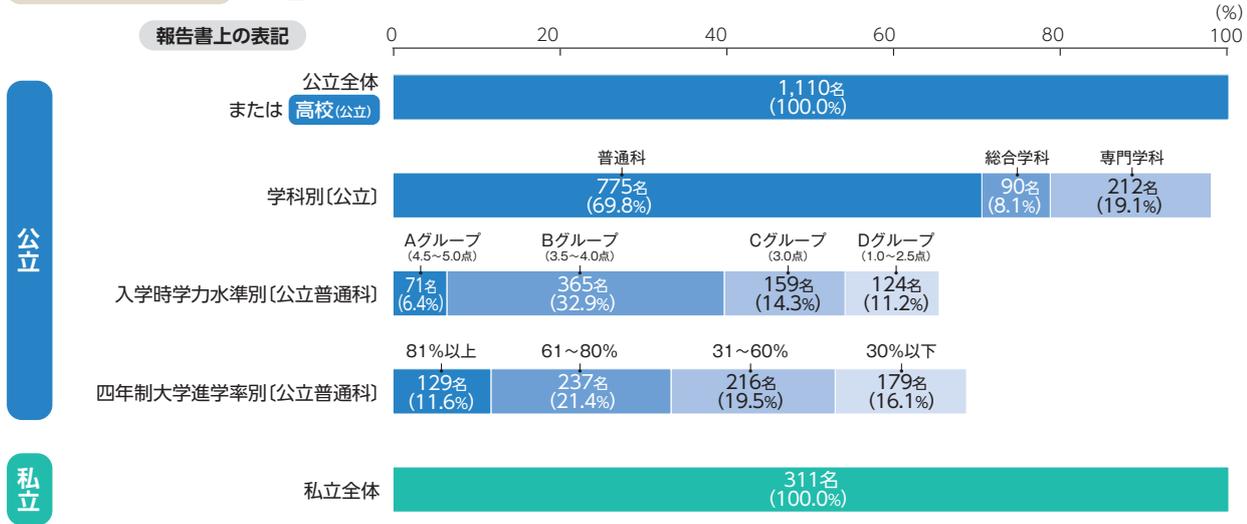
		国語	地理歴史	公民	数学	理科	外国語	無回答・不明	計
高校 (公立)	人数	1,153	993	541	1,271	1,099	1,268	111	6,436
	%	17.9	15.4	8.4	19.7	17.1	19.7	1.7	100.0
高校 (私立)	人数	342	307	158	371	320	368	21	1,887
	%	18.1	16.3	8.4	19.7	17.0	19.5	1.1	100.0

# 分析の枠組み

本報告書では、高校について以下のような分析軸を用いて集計を行っている。

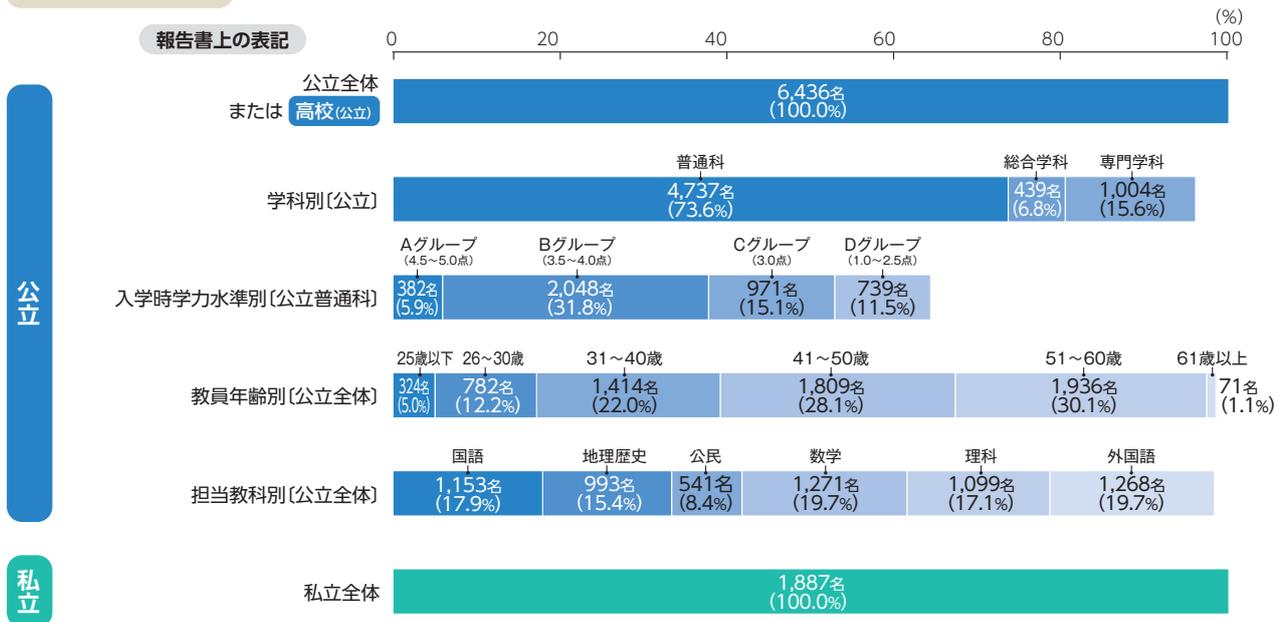
## 校長回答について

校長



教員

## 教員回答について



注1) %は公立・私立別に全数に対する割合を示している。

注2)「入学時学力水準」は、「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績(評定平均)」に対する校長の回答にもとづいて分類したもの。

注3)「四年制大学進学率」は「昨年度の進路別の人数割合(現役生のみ)」に対する校長の回答にもとづいて分類したもの。

注4)「入学時学力水準」「四年制大学進学率別」は公立普通科内の区分であるが、「無回答・不明」を省略しているため、合計は公立普通科の人数とは一致しない。

注5)「学科別」は、校長回答については、「設置学科のうちもっとも募集定員が多い学科」の校長の回答を、教員回答については、「あなたがもっとも多く授業を担当している学科」の教員の回答にもとづいて分類した。

# ① 指導に対する意識

## 1-1 教員の指導観

### 10年に比べ、「強制的な学習」より「自発的な学習」を重視する小・中・高校教員が増加。

小・中・高校教員とも「自発的に学習する意欲や習慣を身につけさせること」を重視する教員が増加した。特に、高校は10年の60.2%から74.3%となり、小・中学校より増加幅が大きい(図1-1A)。

また、子どもの「可能性を支援する」か「教え訓練する」かをみると、小・中学校では、97年・98年～10年までは子どもの学びに対して、教員の強制的・教え訓練志向が強まっていたが、16年の結果をみると、子どもの自主性・可能性支援を重視する割合が増加に転じたことがわかった。高校も10年に比べ、子どもの「可能性を支援する」教員が増えている(中学校39.0%→44.7%、高校41.9%→46.2%)(図1-1B)。

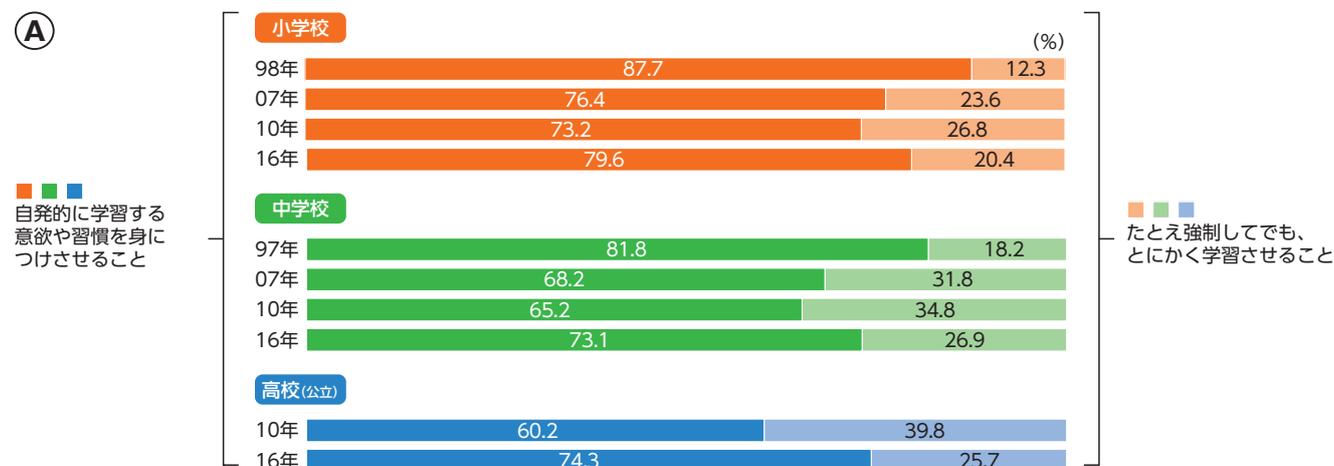
10年に比べ、「楽しく学べる授業」を重視すると回答した教員の割合は小・中学校では微増であるのに対して、高校では、5.5ポイント増加し、小・中・高校ともほぼ5割～6割弱の教員が「楽しく学べる授業」を重視している(図1-1C)。

教職経験年数別にみると、小・中・高校とも、教職経験年数が短い教員ほど「楽しく学べる授業」を重視する傾向が強い(図1-2)。

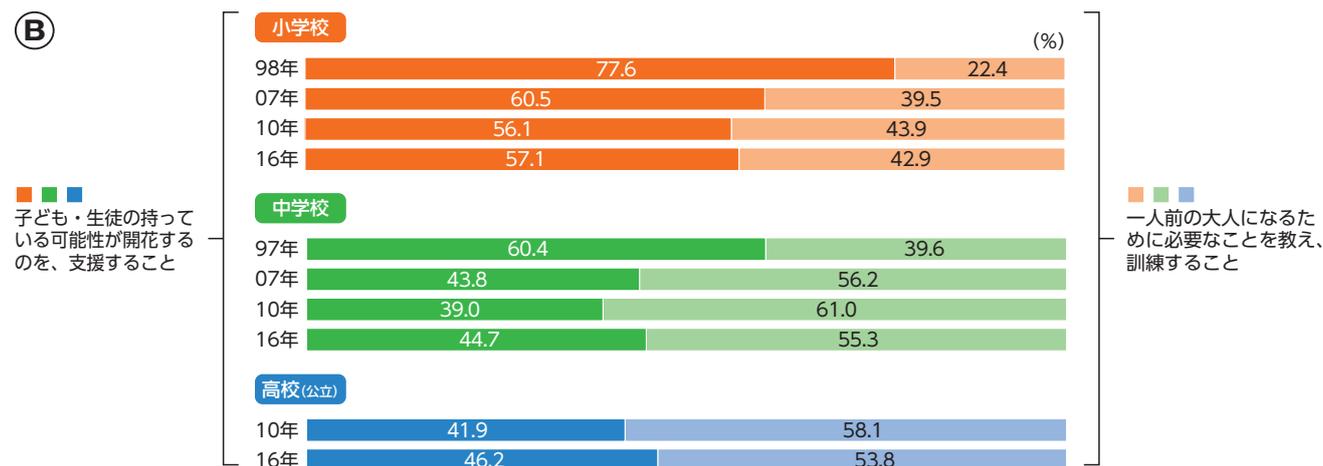
**Q** あなたは、授業や生活指導・生徒指導の面で、どのようなことを大切にしていますか。各ペアについて、あなたがあえていえば重視していると思うほうの番号1つに○をつけてください。

図1-1 教員の指導観①(経年比較) **小学校** **中学校** **高校** **教員**

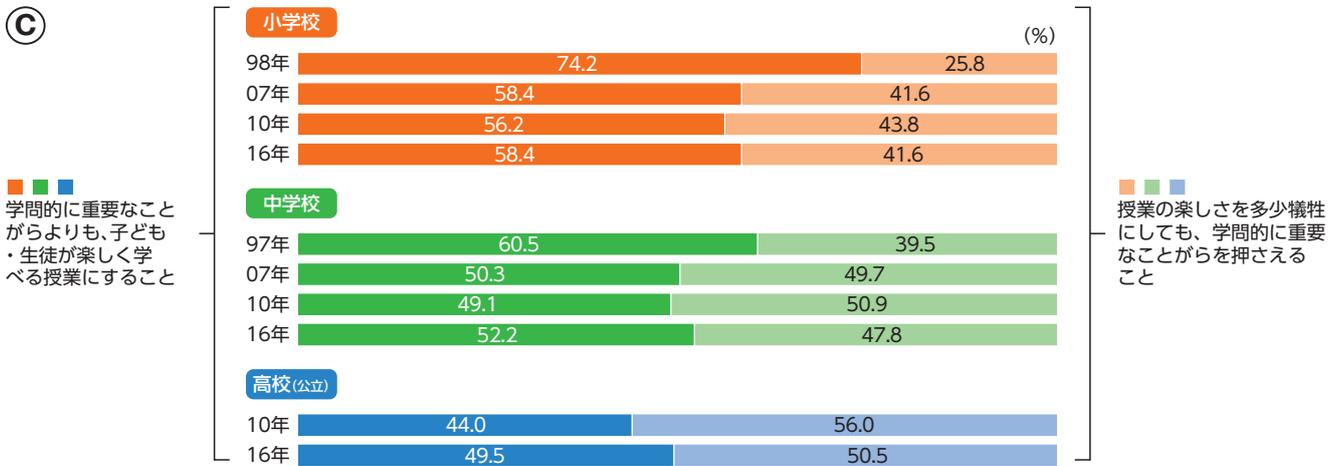
#### ① 自主性・可能性支援が訓練重視か



### 中学校・高校では「教え訓練する」より「可能性を支援する」傾向が強まっている。

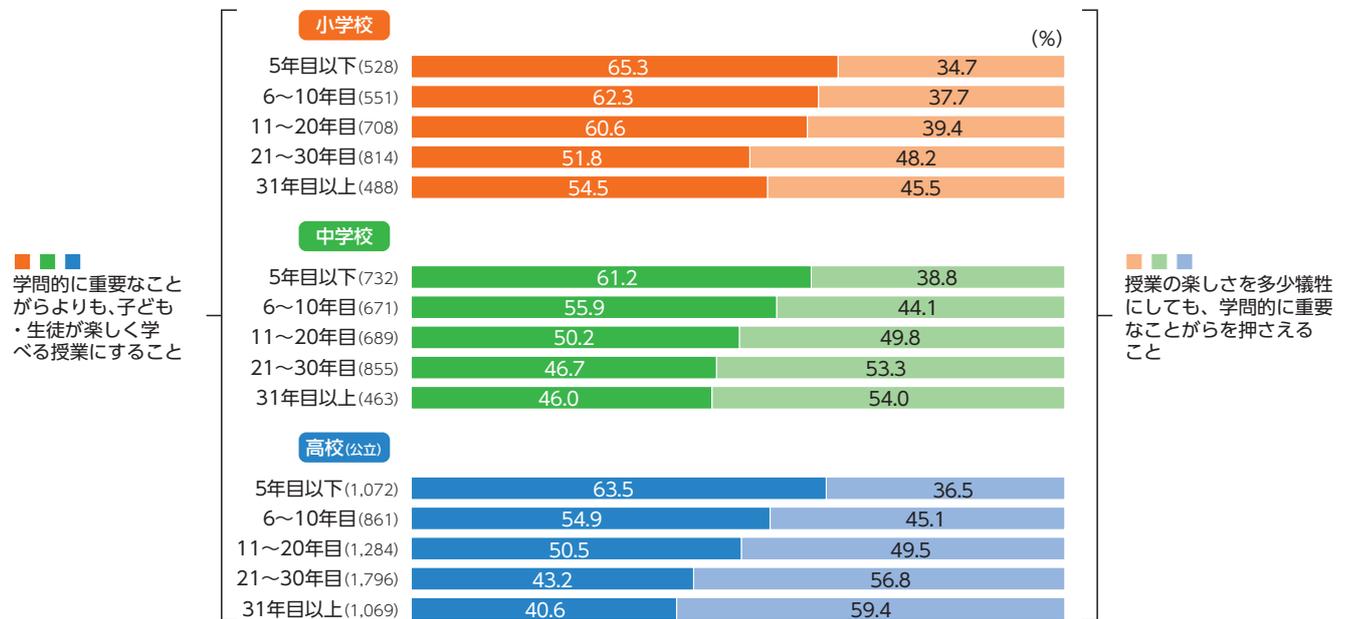


高校で「楽しく学べる授業」を重視する教員が4割強から5割に増加。



教職経験年数が短い教員ほど「楽しく学べる授業」を重視。

図1-2 教員の指導観 ③ (教職経験年数別) 小学校 中学校 高校 教員



## 1-1 教員の指導観

### 「得意な教科や領域の学力を伸ばすこと」を重視する高校教員が大幅に増加し、6割弱となる。

「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」か「得意な教科や領域の学力を伸ばすこと」のどちらを重視するかをたずねたところ、小・中学校では07年からあまり大きな変化がみられず、小学校教員の7割、中学校教員の6割は「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」と回答した。高校では、「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」を重視する教員は10年には5割を超えていたが、16年には4割に減少した。一方で「得意な教科や領域の学力を伸ばすこと」の傾向が強まり、6割弱となった(図1-3D)。

また、「どの子にもできるだけ学力をつけさせること」を重視している小・中・高校教員は8～9割である。ただし、高校では、「勉強が苦手な子どもには、別の能力を伸ばしてやること」を重視する教員が増えている(10年9.7%、16年15.7%)(図1-3E)。

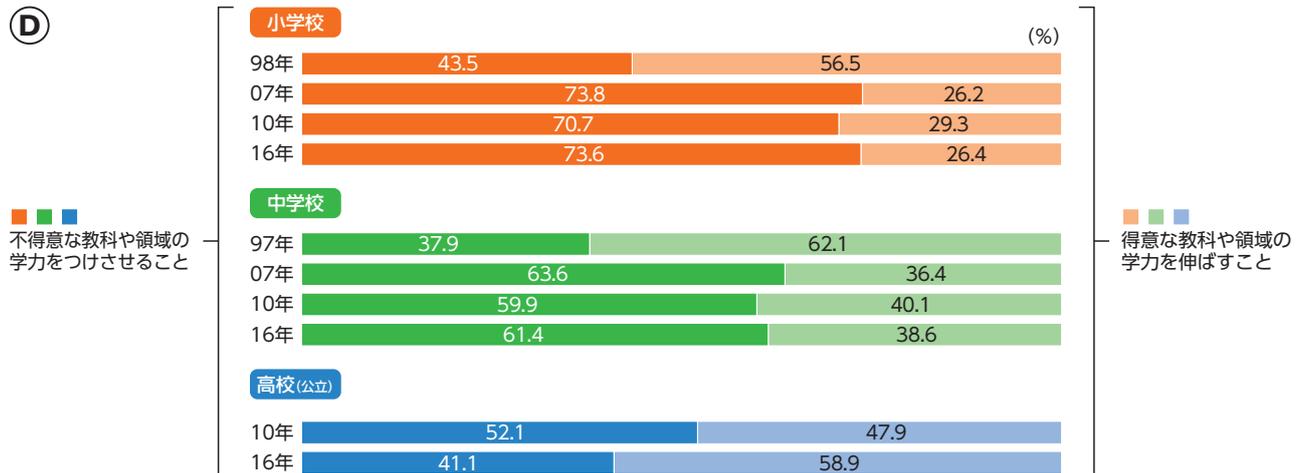
中・高校教員に「受験に役立つ知識・スキルを教えること」か「上級学校や社会に出てから役立つ内容を教えること」かをたずねたところ、中・高校教員とも後者を重視する傾向は10年と変わらないが、高校では、その傾向がさらに強まっている(10年56.7%→16年62.9%)(図1-3F)。

高校について、さらに入学時学力水準別でみると、A・Bグループは「受験に役立つ知識・スキルを教えること」を重視し、C・Dグループは「上級学校や社会に出てから役立つ内容を教えること」を重視する傾向である(図1-4)。

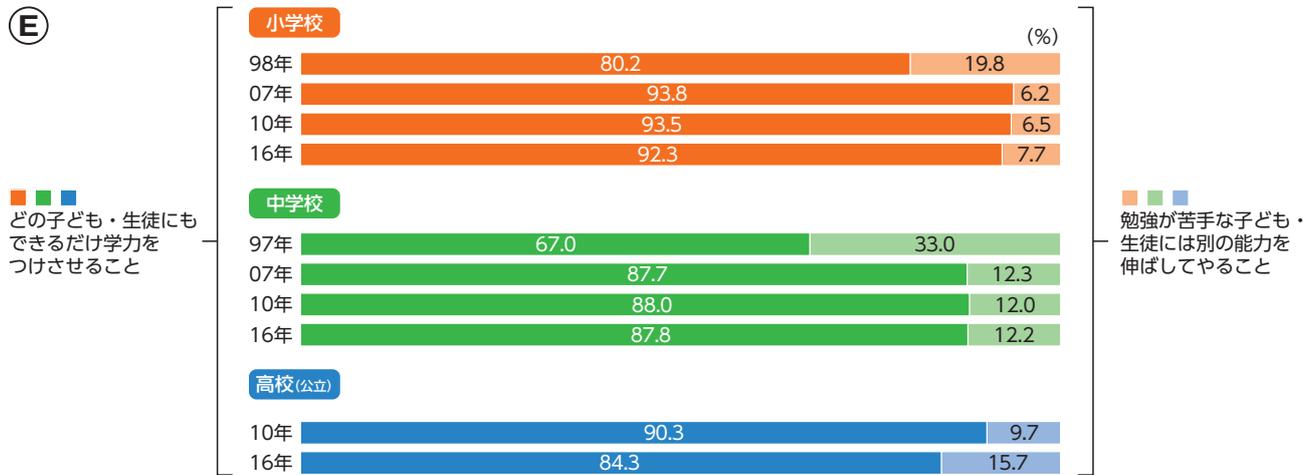
**Q** あなたは、授業や生活指導・生徒指導の面で、どのようなことを大切にしていますか。各ペアについて、あなたがあえて言えば重視していると思うほうの番号1つに○をつけてください。

図1-3 教員の指導観②(経年比較) **小学校** **中学校** **高校** **教員**

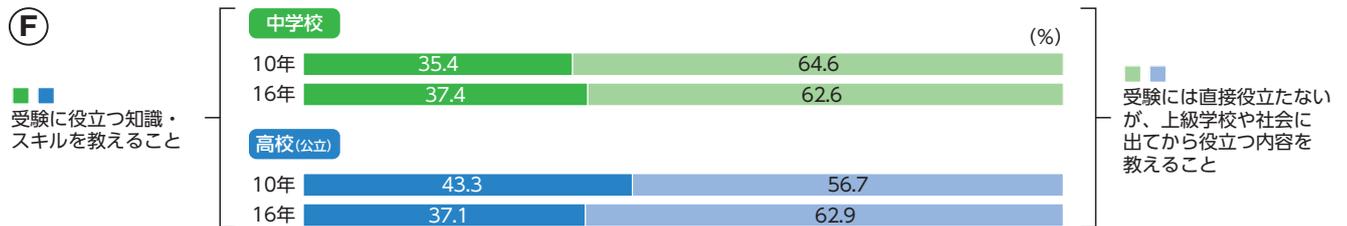
#### ②教育内容、学校・教員の役割



「どの子どもにもできるだけ学力をつけさせること」を重視する小・中・高校教員は8～9割。

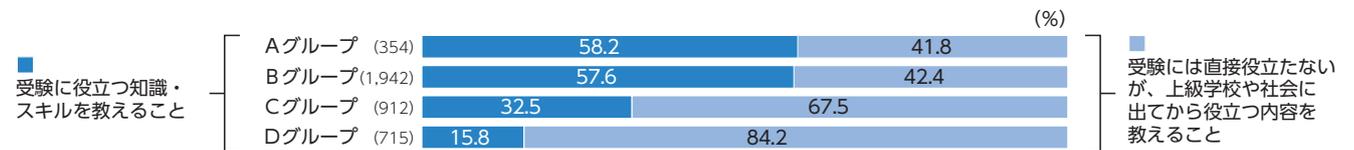


高校では「上級学校や社会に出てから役立つ内容を教えること」を重視する傾向が強まっている。



注1) 小学校にはたずねていない。  
 注2) 数値は無回答・不明を除いて算出している。図1-4も同じ。

図1-4 教員の指導観 ⑥ (入学時学力水準別(公立普通科)) 高校 教員



注) 入学時学力水準は、「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代よりの成績(評定平均)」に対する校長回答による。評定平均はAグループ4.5～5.0点、Bグループ3.5～4.0点、Cグループ3.0点、Dグループ1.0～2.5点として公立普通科について分類した。

## 1-2 児童・生徒に身につけている力

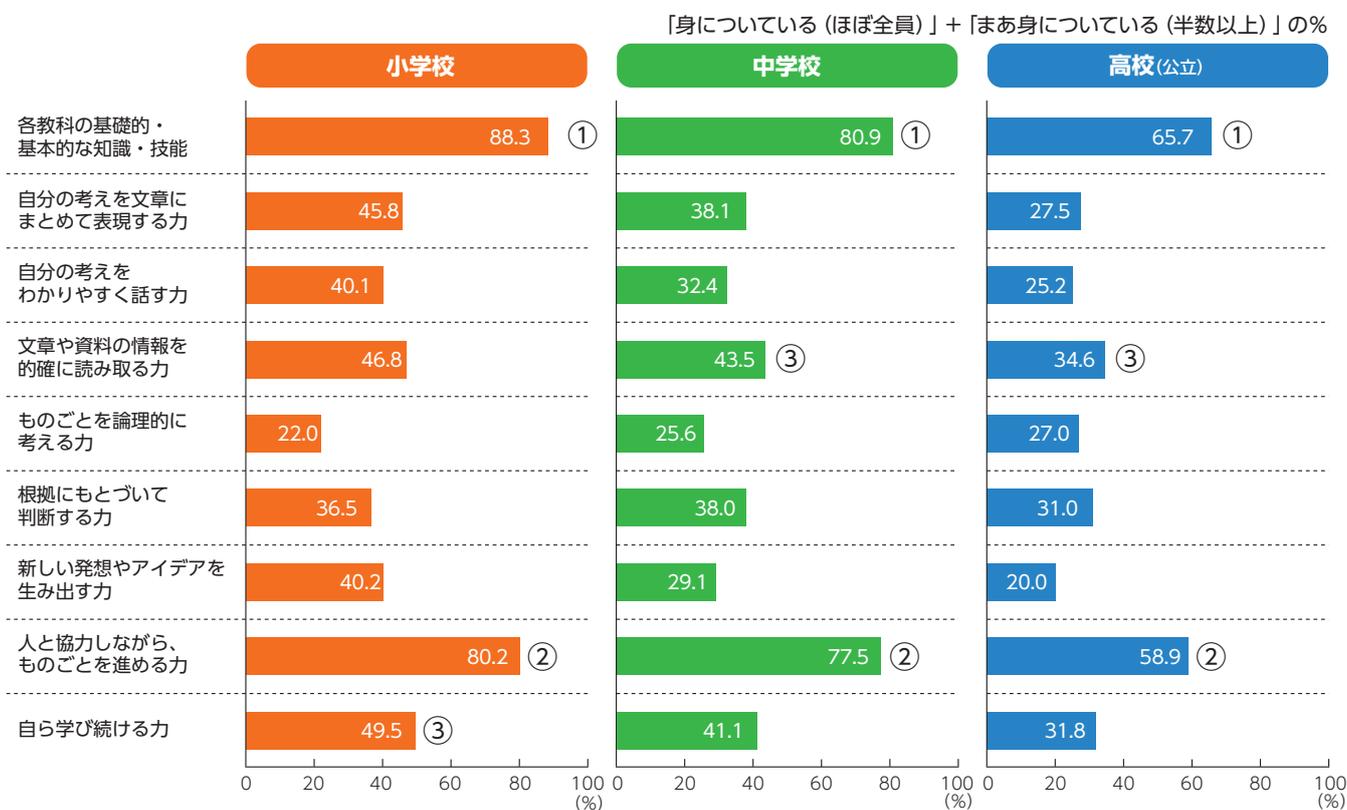
小・中学校では「ものごとを論理的に考える力」、高校では「新しい発想やアイデアを生み出す力」の評価が低い。

児童・生徒に「身につけている」(「身につけている」+「まあ身につけている」、以下同)と感じている力として高いのは、どの学校段階でも「各教科の基礎的・基本的な知識・技能」「人と協力しながら、ものごとを進める力」である。逆に評価が低いのは、小・中学校では「ものごとを論理的に考える力」、高校では「新しい発想やアイデアを生み出す力」であった。また、ほとんどの項目で、学校段階があがるにつれて「身につけている」との評価は各学校段階の求めるレベルが上がるのに応じて低くなる傾向がみられるが、「ものごとを論理的に考える力」のみわずかではあるが増加している。



あなたは、受け持ちの児童・生徒に関して、次のような力がどれくらい身につけていると思いますか。

図1-5 児童・生徒に身につけている力 **小学校** **中学校** **高校** **教員**



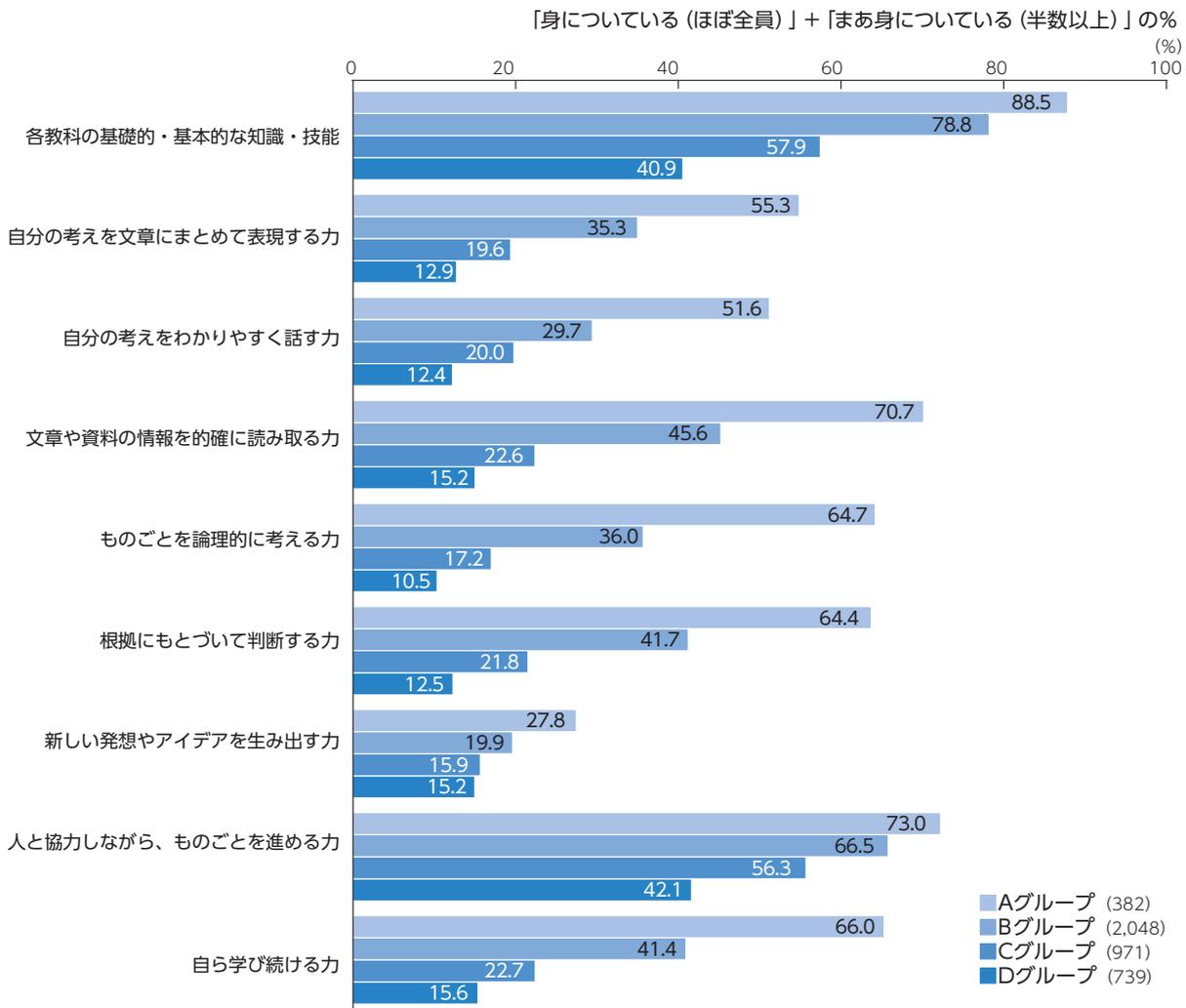
注1) 選択肢は「身につけている(ほぼ全員)」「まあ身につけている(半数以上)」「あまり身につけていない(半数以下)」「ほとんど身につけていない(一部児童・生徒のみ)」「わからない」の5択。

注2) 学校段階別に上位3位までを①~③と表示している。

**学力層別に違いが大きいのは、「文章や資料の情報を的確に読み取る力」や「論理的に考える力」。**

高校について身につけている力を入学時学力水準別(公立普通科)にみると、全般に学力層別の違いが大きく、学校によって指導の前提となる生徒の状況が大きく異なっていることがわかる。特に「文章や資料の情報を的確に読み取る力」「ものごとを論理的に考える力」「根拠にもとづいて判断する力」「自ら学び続ける力」などで違いが大きい。逆に、相対的に差異が少ないのは「新しい発想やアイデアを生み出す力」である。

図1-6 生徒に身につけている力(入学時学力水準別(公立普通科)) **高校** **教員**



注)入学時学力水準は、「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績(評定平均)」に対する校長回答による。評定平均はAグループ: 4.5~5.0点、Bグループ: 3.5~4.0点、Cグループ: 3.0点、Dグループ: 1.0~2.5点として公立普通科について分類した。

# 1-3 児童・生徒に身につけさせたい力

## 「各教科の基礎的・基本的な知識・技能」や「自ら学び続ける力」が上位に。

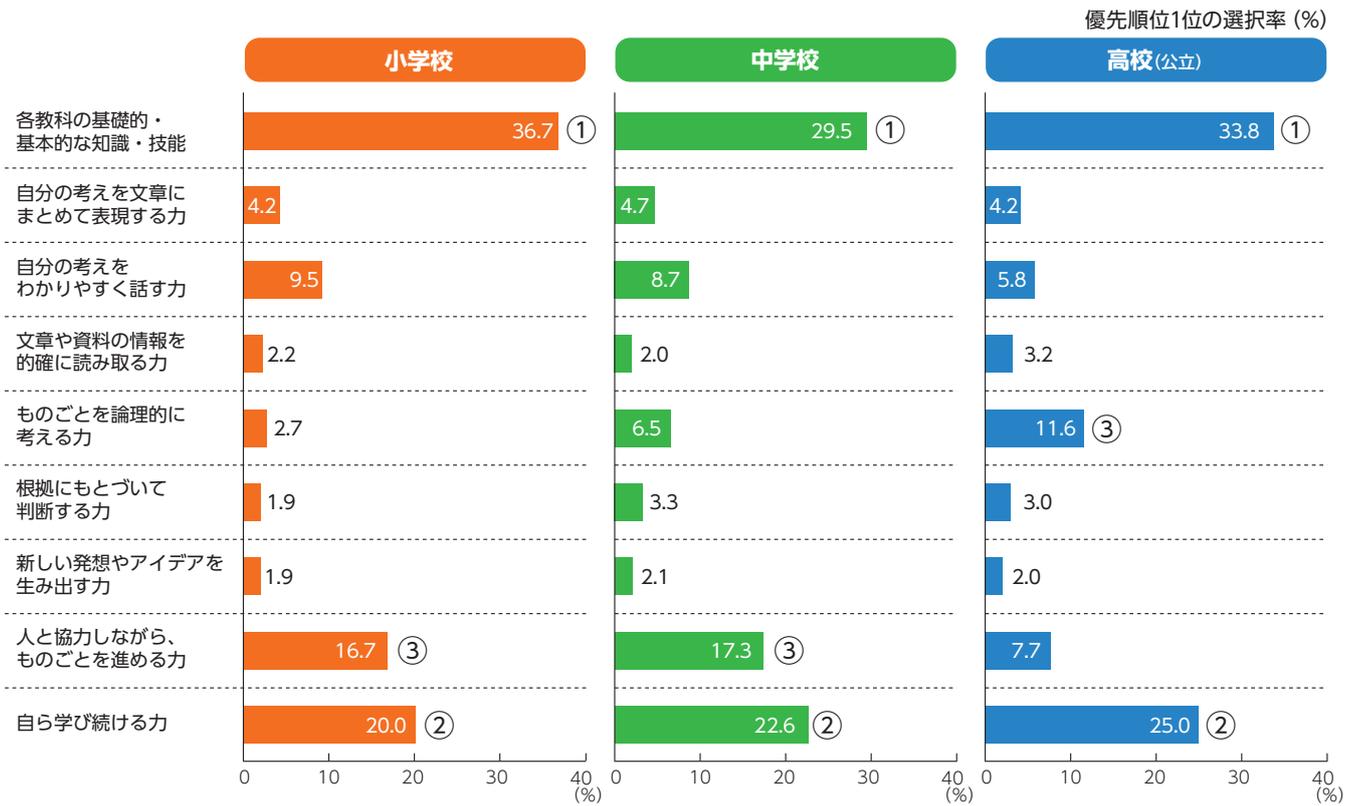
児童・生徒に「身につけさせたい力」の優先順位1位として挙げられたものは、小・中・高校とも「各教科の基礎的・基本的な知識・技能」がもっとも高く、次いで「自ら学び続ける力」である。3番目は小・中学校では「人と協力しながら、ものごとを進める力」、高校では「ものごとを論理的に考える力」となっている。

さらに、高校について入学時学力水準別(公立普通科)にみると、A・Bグループでは「自ら学び続ける力」がもっとも高く、C・Dグループでは「各教科の基礎的・基本的な知識・技能」がもっとも高い(表1-1)。

また、高校について、身につけさせたい力の優先順位1位～3位の全ての分布を示したのが表1-2である。1～3位を通してもっとも多く挙げられたのは、「自ら学び続ける力」、次いで「各教科の基礎的・基本的な知識・技能」「ものごとを論理的に考える力」の順であった。

**Q** あなたが児童・生徒に身につけさせたいと思っている力を、優先順位の高い順に3つ選んでください。

図1-7 身につけさせたい力(優先順位1位) **小学校** **中学校** **高校** **教員**



注) 学校段階別に上位3位までを①～③と表示している。

### 1-3 児童・生徒に身につけさせたい力

表1-1 身につけさせたい力<優先順位1位の上位5項目>(入学時学力水準別(公立普通科)) **高校** **教員**

		優先順位1位の選択率(%)							
		Aグループ (382)		Bグループ (2,048)		Cグループ (971)		Dグループ (739)	
1	自ら学び続ける力	27.2	30.0	35.5	41.5	27.2	30.0	35.5	41.5
2	各教科の基礎的・ 基本的な知識・技能	26.2	28.7	25.3	17.6	26.2	28.7	25.3	17.6
3	ものごとを論理的に 考える力	16.8	13.5	10.2	12.0	16.8	13.5	10.2	12.0
4	人と協力しながら、 ものごとを進める力	5.8	6.1	7.5	8.0	5.8	6.1	7.5	8.0
5	自分の考えをわかりや すく話す力	5.0	5.0	6.9	7.2	5.0	5.0	6.9	7.2

注)入学時学力水準は、「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績(評定平均)」に対する校長回答による。評定平均はAグループ4.5～5.0点、Bグループ3.5～4.0点、Cグループ3.0点、Dグループ1.0～2.5点として公立普通科について分類した。

### 1位～3位全体でもっとも多く挙げられたのは「自ら学び続ける力」。

表1-2 身につけさせたい力<優先順位1位～3位>(公立全体) **高校** **教員**

	選択率(%)			
	優先順位 1位	優先順位 2位	優先順位 3位	1～3位計 (選択数計/教員数)
各教科の基礎的・基本的な知識・技能	33.8①	6.9	8.7	49.4②
自分の考えを文章にまとめて表現する力	4.2	8.3	7.5	20.0
自分の考えをわかりやすく話す力	5.8	11.6③	12.9	30.3
文章や資料の情報を的確に読み取る力	3.2	8.5	6.2	17.9
ものごとを論理的に考える力	11.6③	20.3①	13.0③	44.9③
根拠に基づいて判断する力	3.0	10.6	11.7	25.3
新しい発想やアイデアを生み出す力	2.0	4.2	5.9	12.1
人と協力しながら、ものごとを進める力	7.7	14.7②	13.2②	35.6
自ら学び続ける力	25.0②	11.0	17.1①	53.1①
無回答・不明	3.8	3.8	3.9	11.5

注1)優先順位1位・2位・3位別に選択率の上位3位までを①～③と表示している。

注2)優先順位1位～3位の%は、それぞれ高校公立全体の教員数6,436を分母としている。「1～3位計」は延べ選択数を全体の教員数6,436を分母として算出したもの。

## ② 授業

### 2-1 心がけている授業方法

小・中学校では「グループ活動」や「話し合い」など協働的な学習がもっとも意識されている。

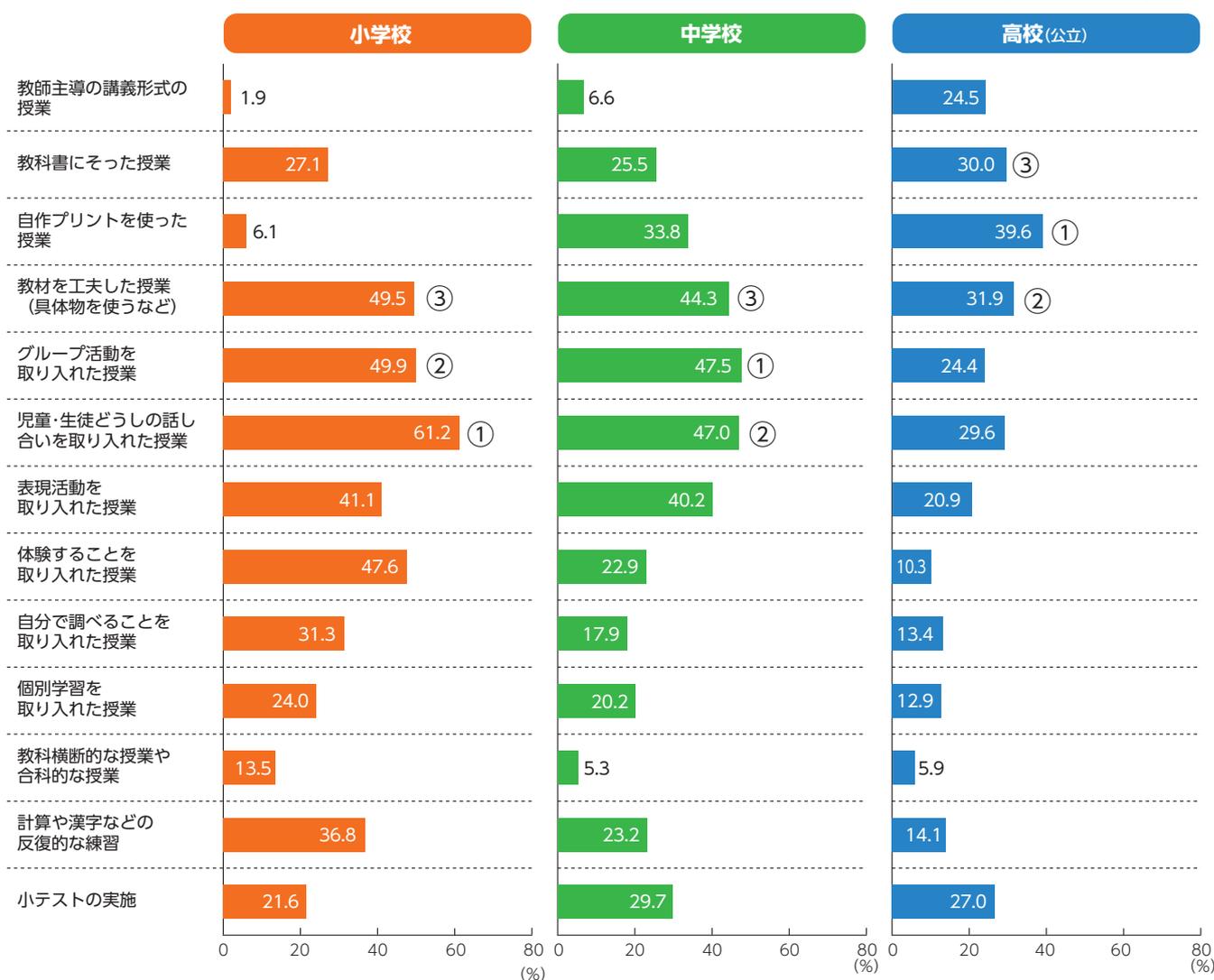
教員が「多くするように特に心がけている」授業方法として多いのは、小・中学校で「グループ活動を取り入れた授業」「児童・生徒どうしの話し合いを取り入れた授業」といった協働的な学習方法である。一方、高校では、「自作プリントを使った授業」がもっとも多い。また、小・中・高校とも共通して多いのは「教材を工夫した授業(具体物を使うなど)」、反対に、共通して少ないのは「教科横断的な授業や合科的な授業」である。

Q

あなたは、教科の授業において、どのような授業方法を心がけていますか。

図2-1 心がけている授業方法 **小学校** **中学校** **高校** **教員**

「多くするように特に心がけている」の%



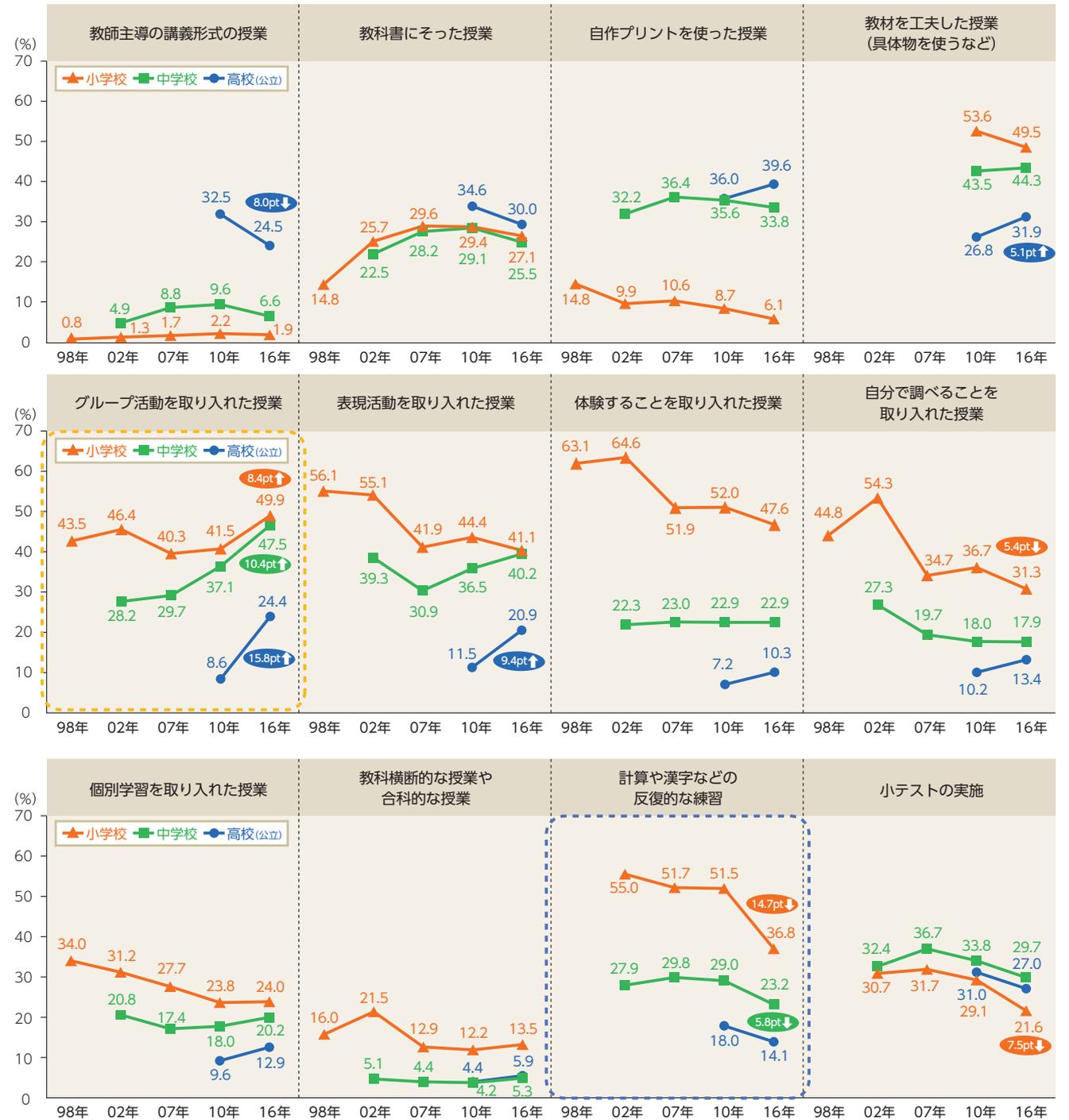
注1) 選択肢は「多くするように特に心がけている」「まあ心がけている」「あまり心がけていない」の3択。

注2) 学校段階別に上位3位までを①～③と表示している。

### 小・中・高校とも10年比で「グループ活動を取り入れた授業」を意識する教員が増加。特に高校の増加幅が大きい。

「多くするように特に心がけている」授業方法について、経年変化をみると、10年比で小・中・高校とも「グループ活動を取り入れた授業」が増加しており、高校は、小・中学校に比べて値は低いものの、15.8ポイント増ともっとも変化が大きい。一方、減少幅の大きいのは、「計算や漢字などの反復的な練習」で、小学校で14.7ポイント減、中学校で5.8ポイント減であった。高校では「教師主導の講義形式の授業」が8.0ポイント減っている。

図2-2 心がけている授業方法(経年比較) 小学校 中学校 高校 教員 「多くするように特に心がけている」の%

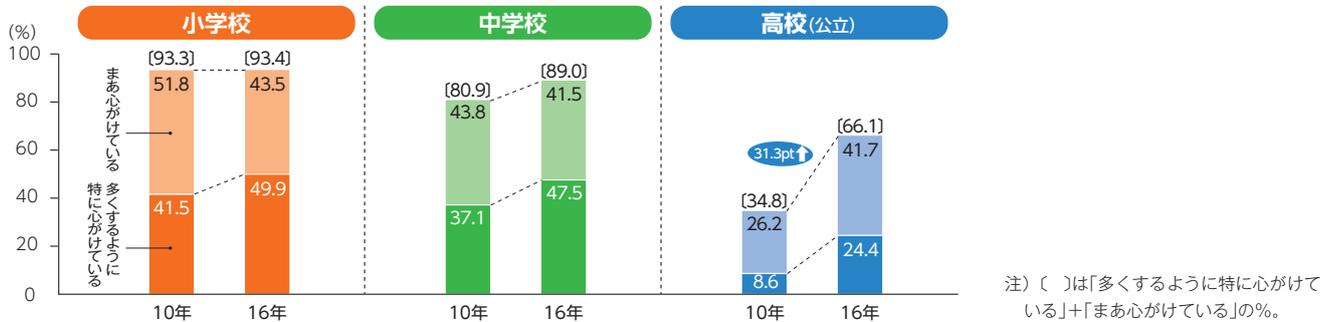


注1) 選択肢は「多くするように特に心がけている」「まあ心がけている」「あまり心がけていない」の3択。  
 注2) 「児童・生徒どうし話し合いを取り入れた授業」は10年以前はたずねていないので、省略している。  
 注3) 中学校の97年調査ではこれらの項目をたずねていない。 注4) 00.0pt↑ 00.0pt↓ は10年調査比で5ポイント以上の増減のあることを表す。

## 2-1 心がけている授業方法

高校は「グループ活動」を「特に+まあ心がけている」の合計値が31.3ポイント増加。中学校との意識の差が縮まる。

図2-3 「グループ活動を取り入れた授業」を心がけている割合(経年比較) 小学校 中学校 高校 教員



高校の教科別には、「国語」「外国語」「公民」で意識の変化が大きい。

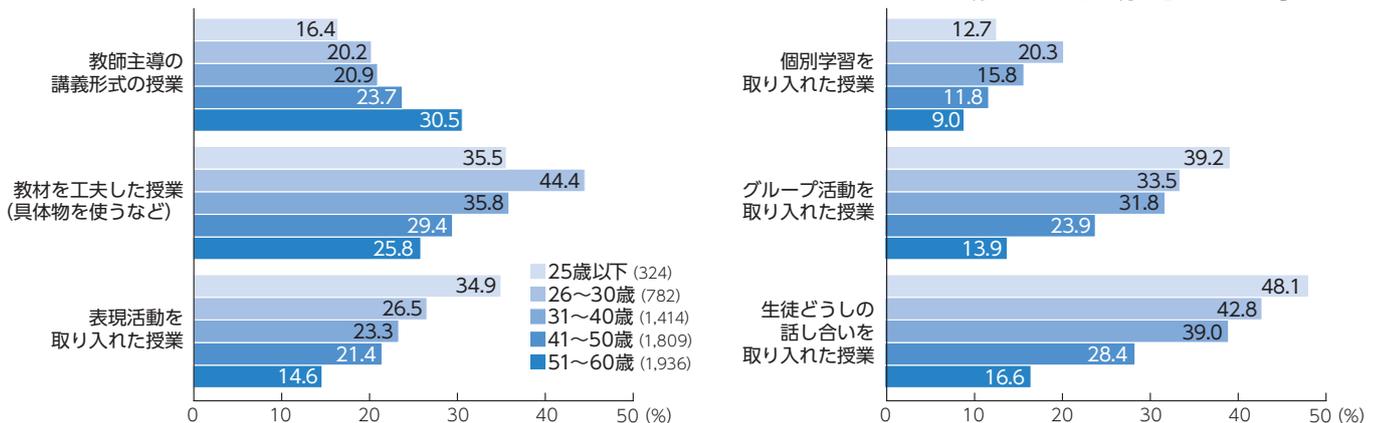
表2-1 心がけている授業方法(経年比較(担当教科別)・9項目[公立全体]) 高校 教員  
「多くするように特に心がけている」の%

	国語			地理歴史			公民			数学			理科			外国語		
	10年 (569)	16年 (1,153)	差	10年 (470)	16年 (993)	差	10年 (178)	16年 (541)	差	10年 (663)	16年 (1,271)	差	10年 (499)	16年 (1,099)	差	10年 (618)	16年 (1,268)	差
教師主導の講義形式の授業	25.8	16.4	-9.4	56.4	39.9	-16.5	44.4	36.0	-8.4	30.9	24.1	-6.8	36.5	29.1	-7.4	16.2	10.9	-5.3
教科書にそった授業	35.3	26.5	-8.8	38.5	36.1	-2.4	30.9	33.6	2.7	36.2	30.1	-6.1	32.7	30.4	-2.3	32.7	26.6	-6.1
自作プリントを使った授業	30.4	30.0	-0.4	48.7	53.2	4.5	41.6	41.8	0.2	17.5	21.3	3.8	38.9	44.6	5.7	46.1	50.2	4.1
教材を工夫した授業(具体物を使うなど)	19.7	22.0	2.3	36.4	39.7	3.3	23.0	32.2	9.2	14.6	17.4	2.8	42.9	47.6	4.7	25.7	34.4	8.7
グループ活動を取り入れた授業	10.0	29.9	19.9	2.1	13.5	11.4	3.9	21.8	17.9	4.1	16.4	12.3	5.4	20.4	15.0	21.4	40.9	19.5
表現活動を取り入れた授業	20.7	30.4	9.7	4.0	11.6	7.6	9.6	17.6	8.0	4.8	9.4	4.6	3.2	12.3	9.1	23.0	40.4	17.4
体験することを取り入れた授業	4.4	6.9	2.5	1.9	5.3	3.4	1.7	7.2	5.5	2.9	4.7	1.8	21.8	22.3	0.5	6.3	13.3	7.0
自分で調べることを取り入れた授業	16.9	19.9	3.0	9.6	16.4	6.8	7.9	15.0	7.1	2.9	4.2	1.3	7.4	9.6	2.2	14.9	16.2	1.3
個別学習を取り入れた授業	13.0	17.3	4.3	3.6	7.8	4.2	1.7	7.9	6.2	10.3	14.4	4.1	6.0	8.5	2.5	15.5	17.5	2.0

注) 網かけは、10年調査と比較して、10ポイント以上の増加を■、減少を■、5ポイント以上10ポイント未満の増加を■、減少を■で示している。

年齢別には、ベテランほど「講義形式」を、若年層ほど「グループ活動」を意識する傾向。

図2-4 心がけている授業方法(教員年齢別[公立全体]) 高校 教員  
「多くするように特に心がけている」の%



## 2-2 心がけている授業時間の使い方

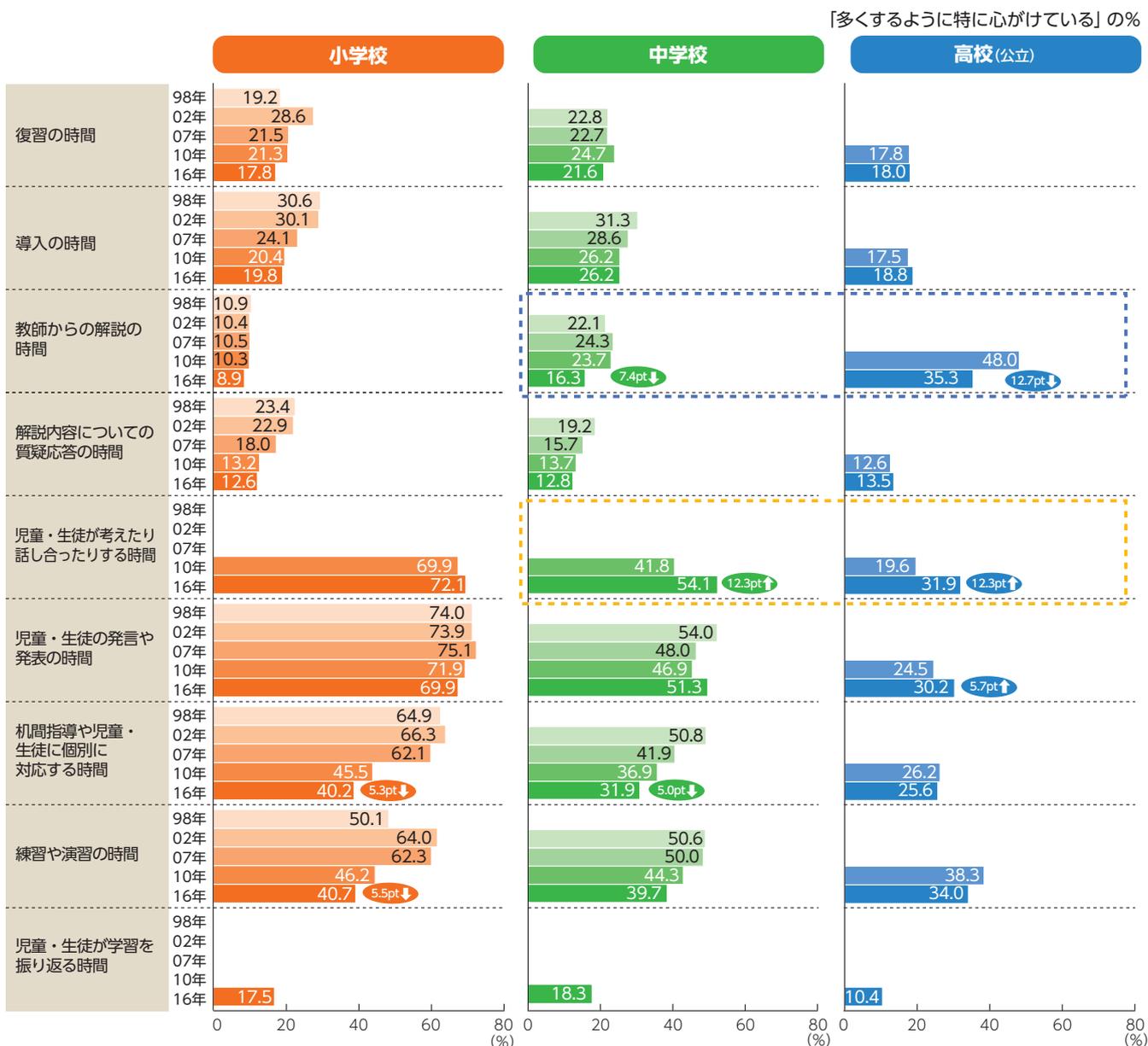
中・高校で、「生徒が考えたり話し合ったりする時間」を意識する教員が増え、「教師からの解説の時間」は減少。

小・中学校の教員が授業の中で「多くするように特に心がけている」時間として高いのは「児童・生徒が考えたり話し合ったりする時間」、高校では「教師からの解説の時間」である。反対に小・中・高校で共通してあまり意識されていない項目が「解説内容についての質疑応答の時間」「児童・生徒が学習を振り返る時間」で、いずれも1割台である。経年で変化が大きいのは、中・高校の「生徒が考えたり話し合ったりする時間」の12.3ポイント増(10年比、以下同)、「教師からの解説の時間」の中学校7.4ポイント減、高校12.7ポイント減であった。

Q

あなたは、教科の授業を進める際にどのような時間の使い方や進め方を心がけていますか。

図2-5 心がけている授業時間の使い方(経年比較) 小学校 中学校 高校 教員



注1) 選択肢は「多くするように特に心がけている」「まあ心がけている」「あまり心がけていない」の3択。

注2) 「児童・生徒が考えたり話し合ったりする時間」は07年以前はたずねていない。「児童・生徒が学習を振り返る時間」は16年のみ。

注3) 中学校の97年調査ではこれらの項目をたずねていない。

注4) 00.0pt↑ 00.0pt↓ は10年調査比で5ポイント以上の増減のあることを表す。

## 2-3 ICT機器を活用した授業

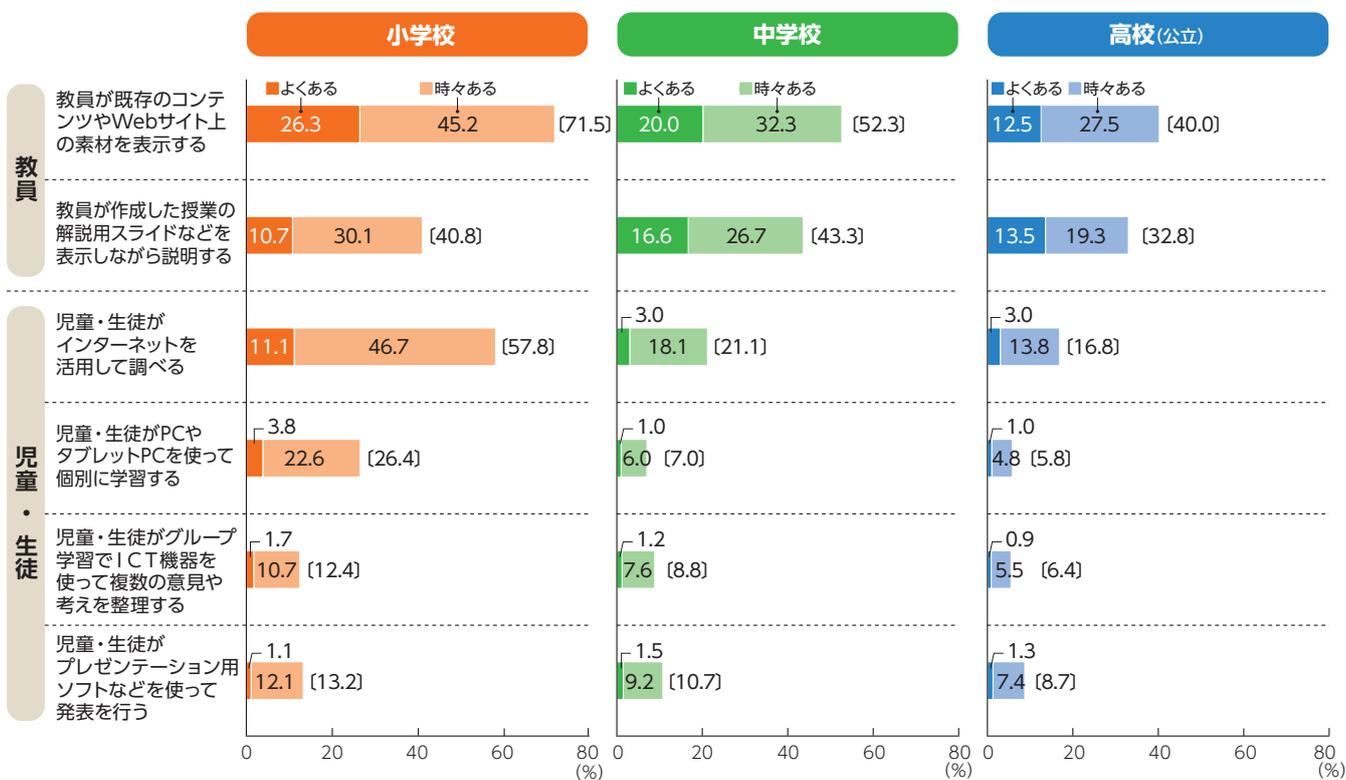
### 中・高校では教科の授業における生徒のPCやタブレットPCの使用率は低い。

授業でのICT機器の使用割合は、ほとんどの項目で小学校がもっとも高く、「教員が作成した授業の解説用スライドなどを表示しながら説明する」のみ中学校が高い。小学校について担任をしている学年別にみると、どの項目も学年が上がるにつれ使用率は上がり、特に「児童がインターネットを活用して調べる」割合は学年差が大きく、高学年では8割以上が使用している。中・高校の担当教科別にみると、教員が学習素材の提示を行っている割合は理科が高い。生徒の利用については「インターネットを活用して調べる」で教科別に活用状況の違いがみられるものの、その他の項目はどの教科も共通して低くなっている。

Q

あなたは、教科の授業において、次のような目的でICT機器を使うことがどれくらいありますか。

図2-6 ICT機器の活用状況 **小学校** **中学校** **高校** **教員**

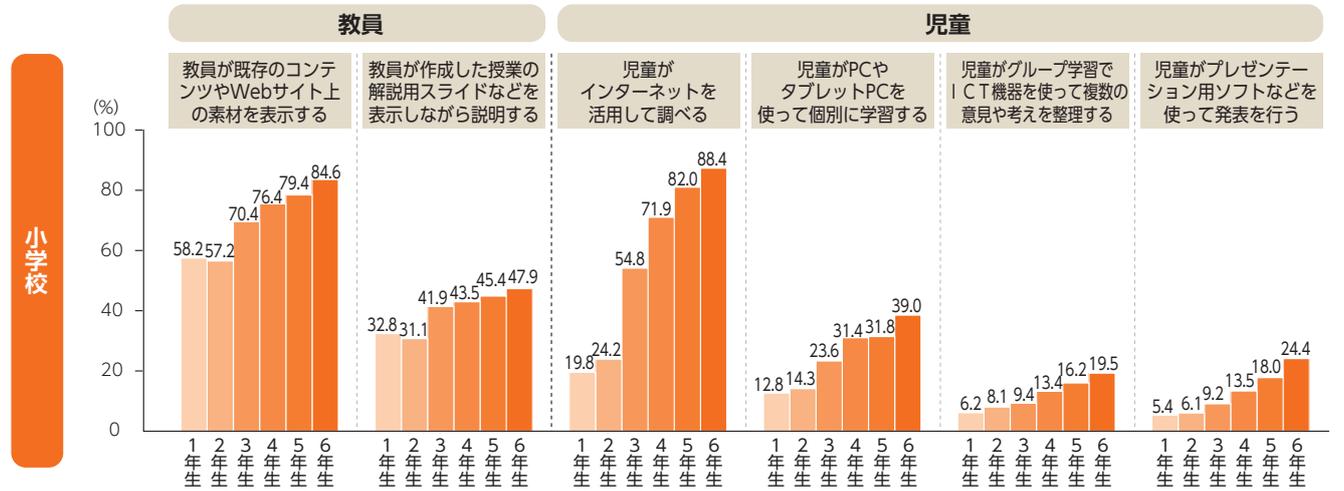


注1)〔 〕内は「よくある」+「時々ある」の%。

注2)小学校は「授業において」、中・高校は「教科の授業において」としてたずねている。

小学校高学年の8割以上が「インターネットを活用して調べる」活動を行っている。

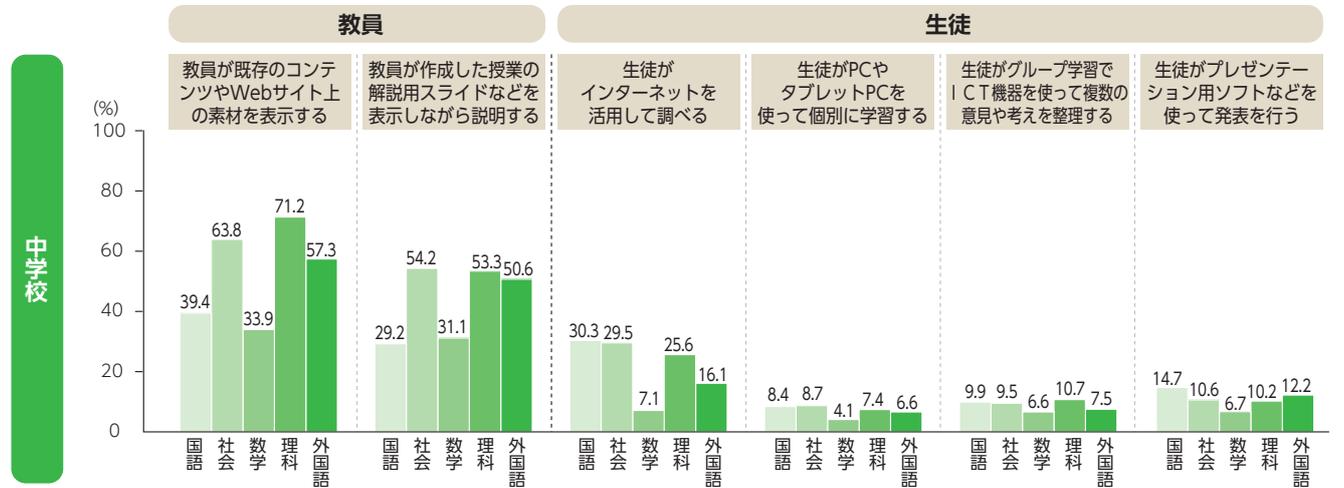
図2-7 ICT機器の活用状況(担任学年別) **小学校** **教員** [よくある]+[時々ある]の%



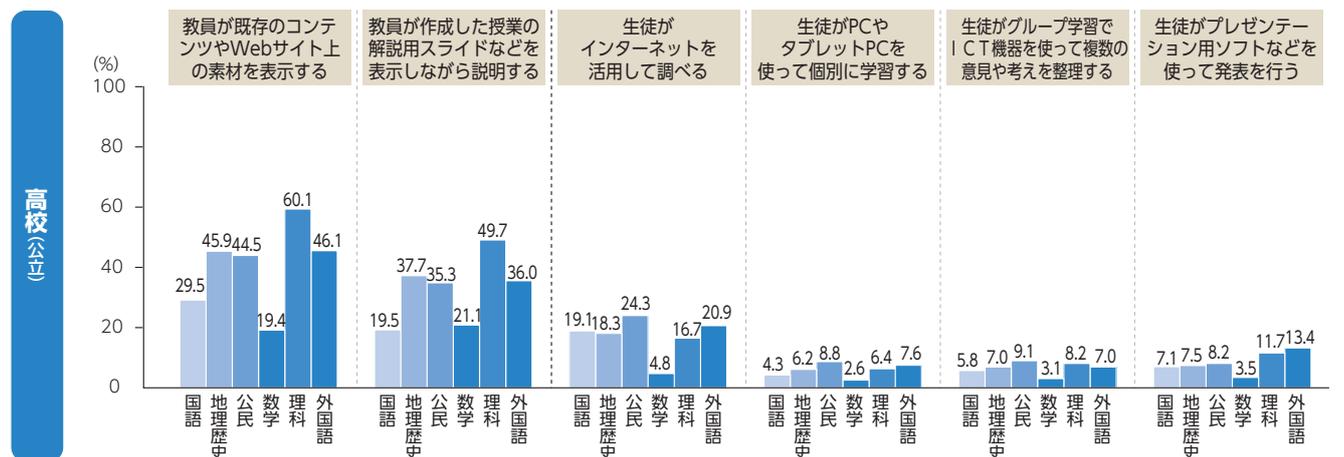
注) サンプル数は、1年生500名、2年生489名、3年生487名、4年生487名、5年生494名、6年生520名。

中・高校の担当教科別では、理科で学習素材の提示のための使用率が高い。

図2-8 ICT機器の活用状況(担当教科別) **中学校** **高校** **教員** [よくある]+[時々ある]の%



注) サンプル数は、国語698名、社会644名、数学841名、理科694名、外国語755名。



注) サンプル数は、国語1,153名、地理歴史993名、公民541名、数学1,271名、理科1,099名、外国語1,268名。

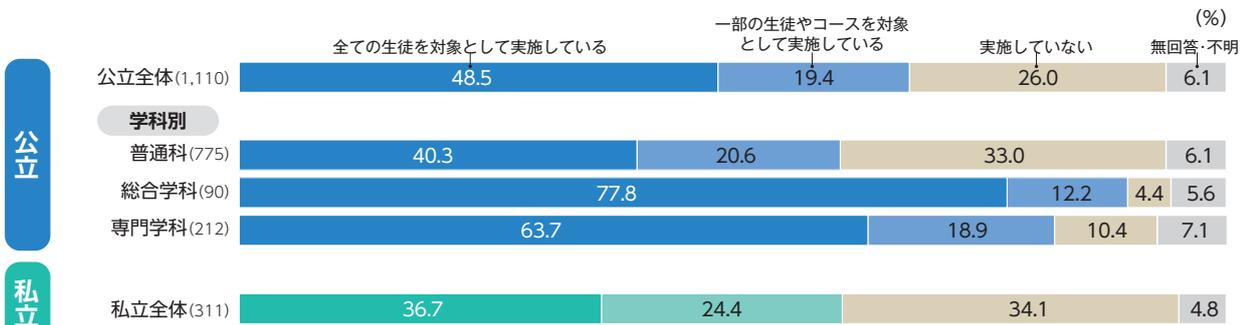
## 2-4 探究学習

### 探究学習・課題解決型学習の実施率は、普通科6割、総合学科9割、専門学科8割。

探究学習・課題解決型学習の実施率(「全ての生徒を対象」+「一部の生徒やコースを対象」)は公立の普通科で6割、総合学科9割、専門学科8割と学科による違いがみられる。学年別の時間数をみると、公立普通科では2年生がもっとも多いが、総合学科・専門学科では、3年生である。私立は1年生が多く、学年があがるにつれて減っていく。

**Q** 貴校では、探究学習・課題解決型学習(主体的・協働的に課題の設定からまとめ・表現や解決までを行う学習)を行っていますか。

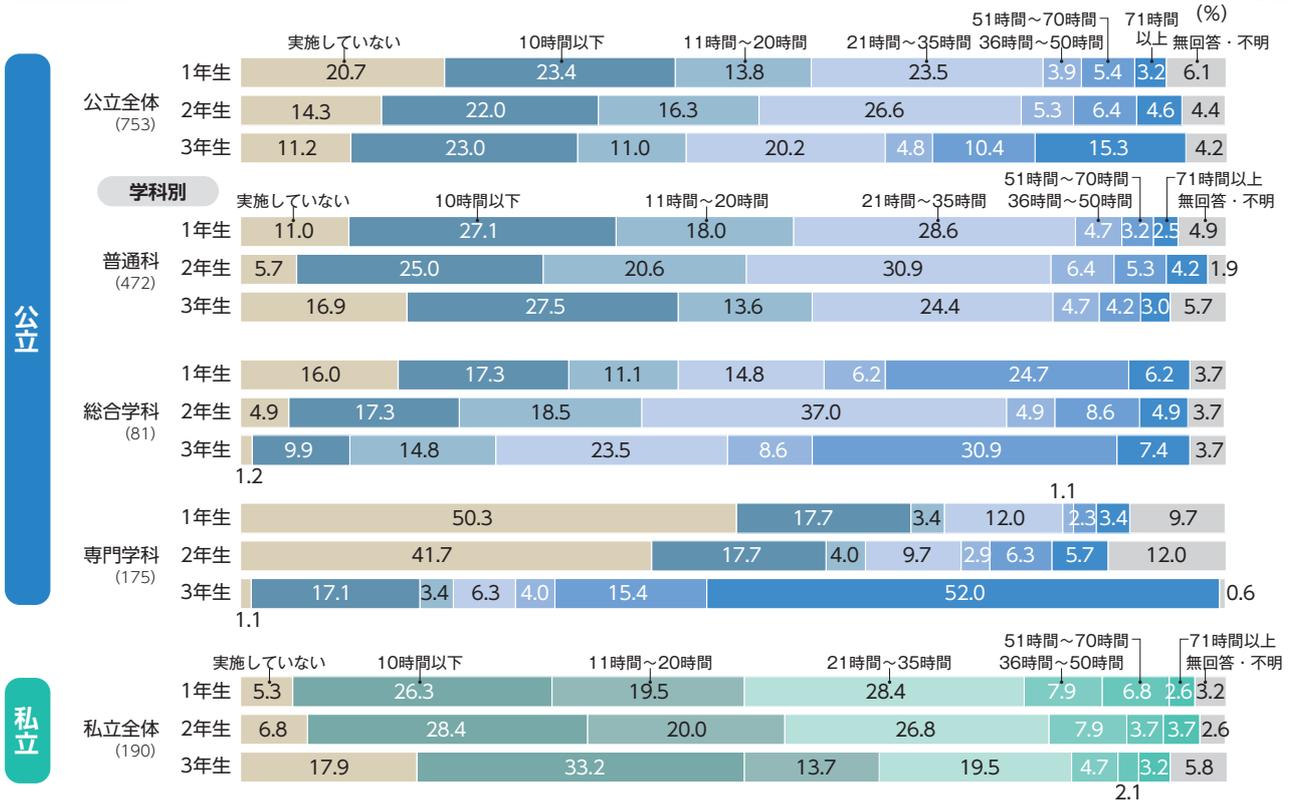
図2-9 探究学習・課題解決型学習の実施率(公立全体、学科別〔公立〕、私立全体) **高校** **校長**



注)本調査における探究学習・課題解決型学習とは、「総合的な学習の時間や学校設定教科を用いて、一定の期間をもって取り組む形式の学習活動」としてたずねている。

**Q** (実施校のみ対象) 貴校では、探究学習・課題解決型学習をどれくらい実施していますか。

図2-10 探究学習・課題解決型学習の実施時間(公立全体、学科別〔公立〕、私立全体) **高校** **校長**

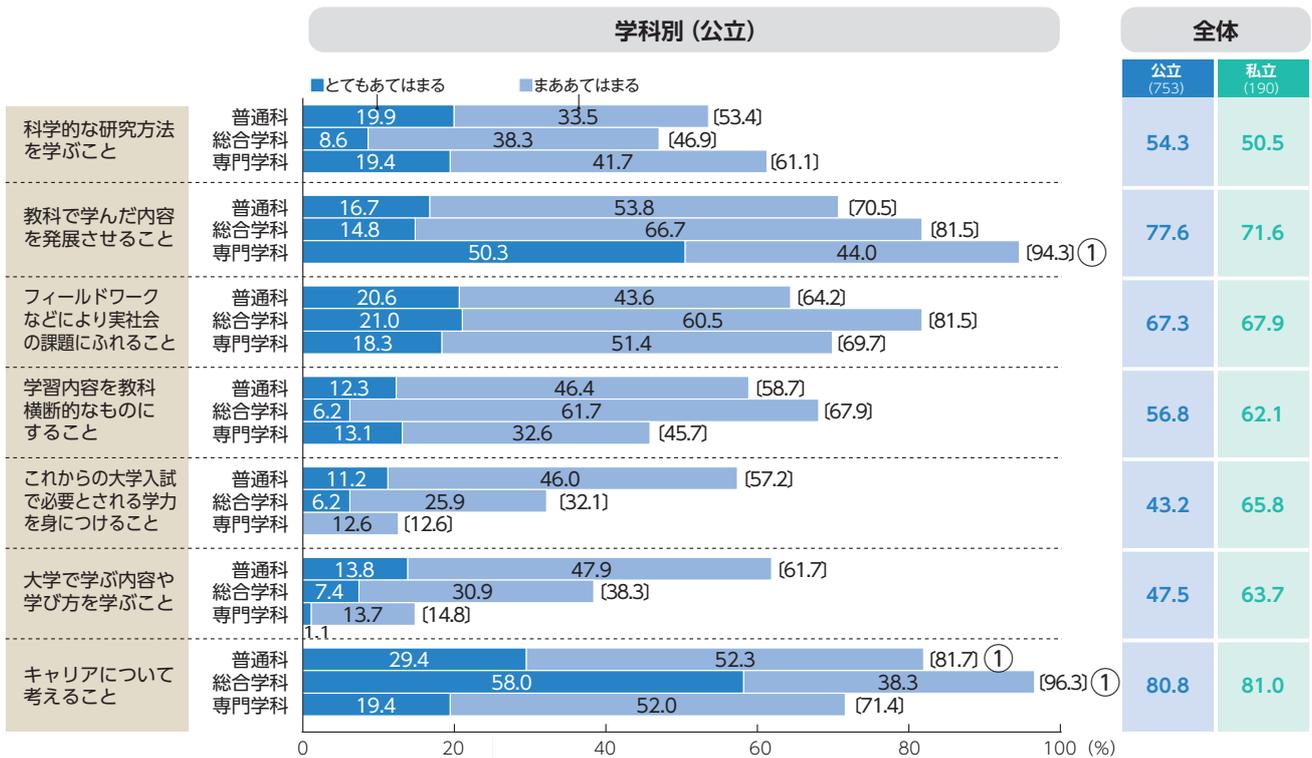


注)対象は、図2-9で「全ての生徒を対象として実施している」または「一部の生徒やコースを対象として実施している」と回答した人。

ねらいとして多いのは普通科・総合学科では「キャリアについて考えること」、  
専門学科では「教科で学んだ内容を発展させること」。

**Q** (実施校のみ対象)  
貴校の探究学習・課題解決型学習ではどのようなことをねらいとしていますか。

図2-11 探究学習・課題解決型学習のねらい(学科別〔公立〕、公立・私立全体) 高校 校長



注1)対象は、図2-9で「全ての生徒を対象として実施している」または「一部の生徒やコースを対象として実施している」と回答した人。  
注2) ( )内は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。  
注3)学科別にもっとも高いものに①を表示している。  
注4)対象は、普通科472名、総合学科81名、専門学科175名。

連携先は、普通科で「大学や研究機関」、総合学科では「自治体や社会施設」、専門学科では「民間企業」が多い。

**Q** (実施校のみ対象)  
貴校では、探究学習・課題解決型学習の指導にあたって次のような機関と連携をしていますか。

表2-2 探究学習・課題解決型学習の連携先(公立全体、学科別〔公立〕、私立全体) 高校 校長

(%) ※複数回答

	公立				私立
	全体 (753)	普通科 (472)	総合学科 (81)	専門学科 (175)	全体 (190)
大学や研究機関	56.2	60.4	53.1	44.0	53.2
民間企業	42.9	36.0	46.9	60.6	34.2
NPO・NGO	17.3	16.9	32.1	9.7	20.0
自治体や社会施設	44.9	40.9	64.2	46.3	22.1
その他	3.7	3.6	3.7	4.0	3.7
連携していない	17.7	20.3	11.1	15.4	26.8

注1)対象は、図2-9で「全ての生徒を対象として実施している」または「一部の生徒やコースを対象として実施している」と回答した人。  
注2)■は各属性別にもっとも高いものを表す。

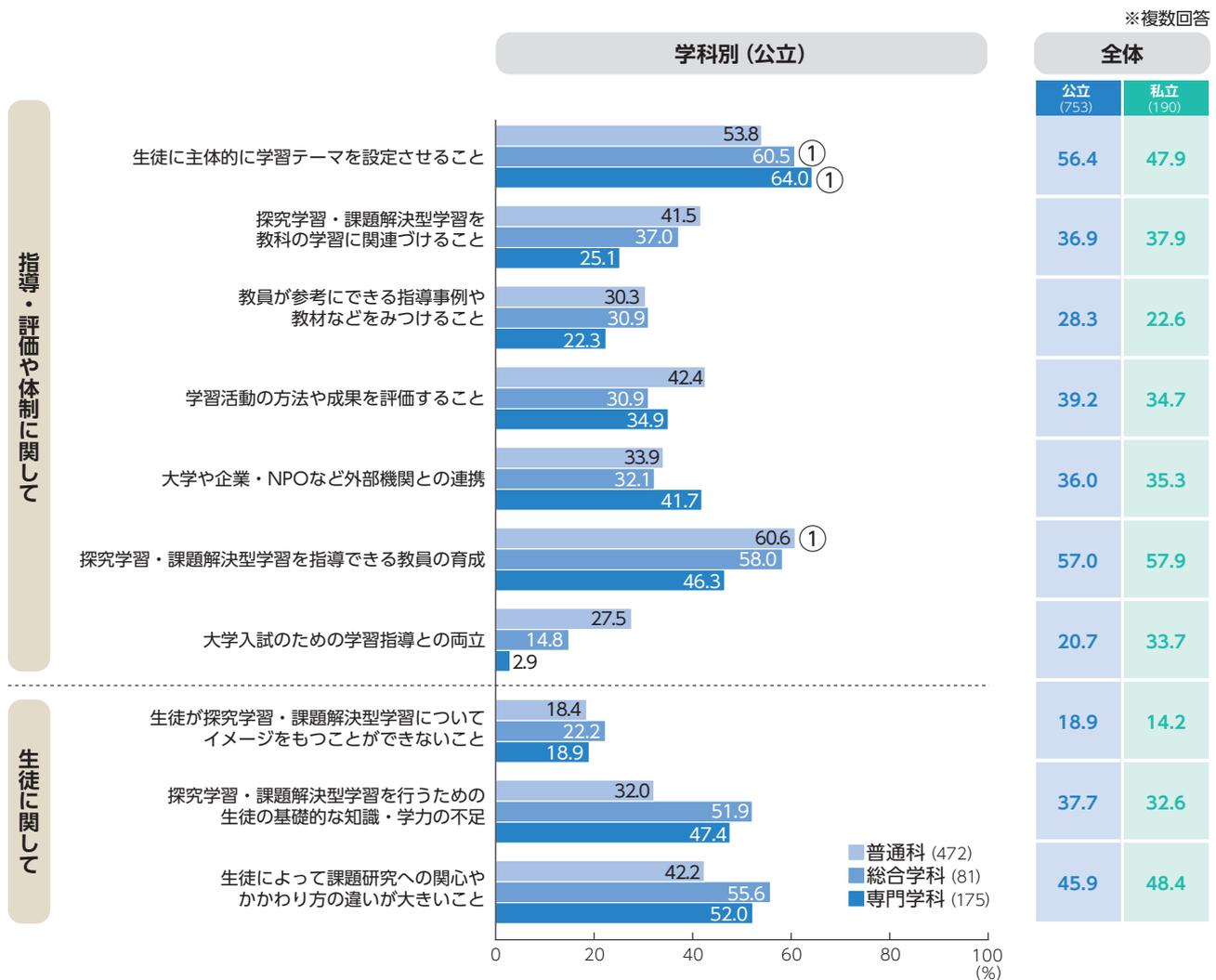
## 2-4 探究学習

### 課題として多いのは、普通科では「探究学習・課題解決型学習を指導できる教員の育成」、総合学科・専門学科では「生徒に主体的に学習テーマを設定させること」

探究学習・課題解決型学習の課題についてたずねたところ、普通科では「探究学習・課題解決型学習を指導できる教員の育成」(60.6%)、総合学科・専門学科では「生徒に主体的に学習テーマを設定させること」(60.5%、64.0%)である。総合学科・専門学科については「生徒によって課題研究への関心やかかわり方の違いが大きいこと」も半数を超えている(55.6%、52.0%)。学科別に違いがみられるのは「大学入試のための学習指導との両立」で、普通科で相対的に高くなっている。

**Q** (実施校のみ対象)  
貴校で探究学習・課題解決型学習を行うにあたって課題に感じていることは何ですか。

図2-12 探究学習・課題解決型学習の課題(学科別〔公立〕、公立・私立全体〔全学科〕) **高校** **校長**



注1)対象は、図2-9で「全ての生徒を対象として実施している」または「一部の生徒やコースを対象として実施している」と回答した人。  
注2)学科別にもっとも高いものに①を表示している。

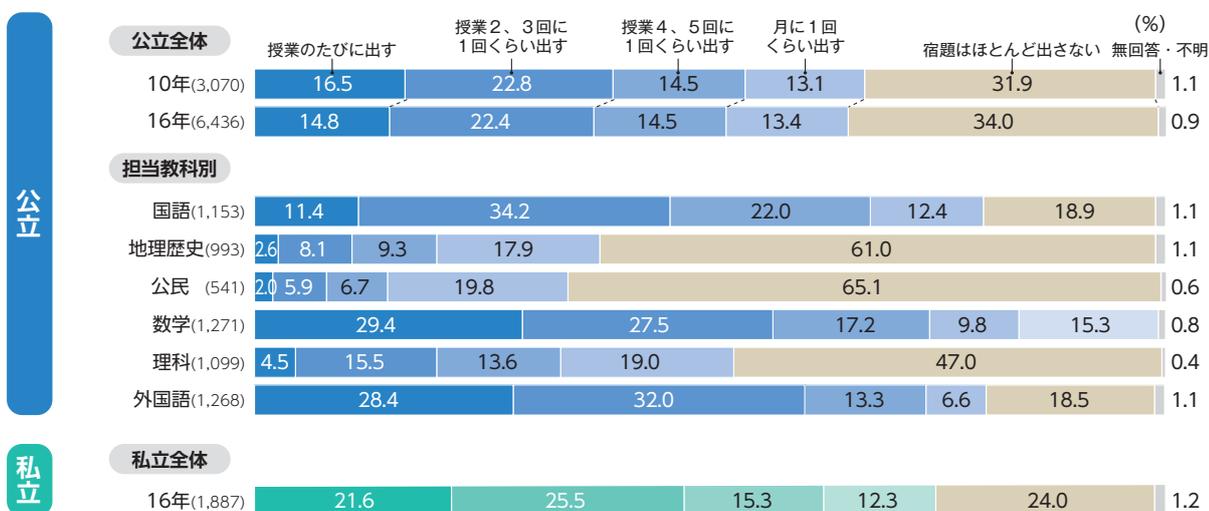
## 3-1 宿題

### 宿題の頻度が高いのは「数学」「外国語」で、「授業のたびに出す」が3割。

宿題の頻度についてたずねたところ、「宿題はほとんど出さない」が34.0%で最も高く、次に「授業2、3回に1回くらい出す」が22.4%で高い(公立)。経年ではほとんど変化はみられず、担当教科別には「数学」「外国語」で高い。また、宿題の時間は「30分」がもっとも多く、こちらも経年の変化はほとんどみられない。さらに、入学時の学力水準別にみると、学力の高いAグループでは「1時間」がもっとも多く、B～Dグループでは「30分」がもっとも多くなっている。

**Q** あなたは、どのくらい宿題を出していますか。

図3-1 宿題の頻度(経年比較(公立全体)、担当教科別(公立全体)、私立全体) 高校 教員



**Q** (「月に1回くらい」以上出すとの回答者対象)  
あなたが出す宿題は、平均的な生徒にとってだいたい1回何分くらいの量になりますか。

図3-2 1回あたりの宿題の時間(経年比較(公立)、入学時学力水準別(公立普通科)、私立全体) 高校 教員



注1)宿題を「授業のたびに出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。

注2)平均時間は、「15分」を15分、「2時間」を120分、「それ以上」を150分のように置き換えて無回答・不明を除外して算出した。

注3)入学時学力水準は、「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績(評定平均)」に対する校長回答による。評定平均はAグループ4.5～5.0点、Bグループ3.5～4.0点、Cグループ3.0点、Dグループ1.0～2.5点として公立普通科について分類した。

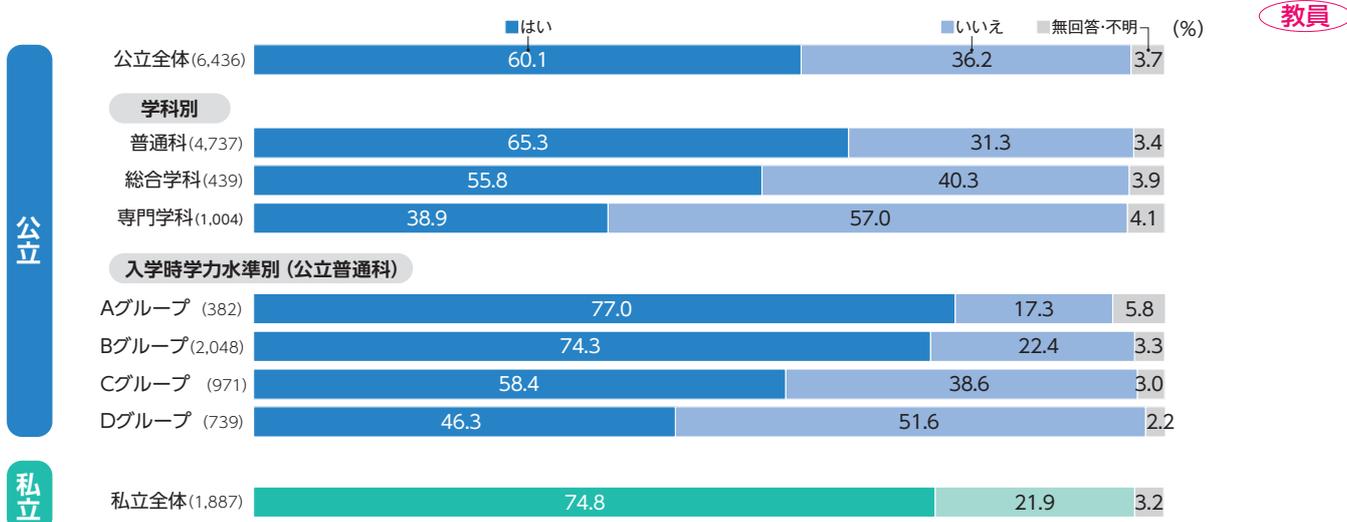
## 3-2 学習計画の指導

### 6割以上の高校教員が学習計画を立てる指導を行っている。

学習計画を立てる指導をしているのは公立の教員の60.1%、私立は74.8%であった。学科別には普通科、入学時の学力水準別には、学力水準が高いほど指導をしている割合が高い。指導内容としては、学習計画書の配付はせずに「自分で計画を立てよう指導している」がもっとも多く、どの学科でもどの学力水準の学校でもっとも多い。次いで多い項目には属性別に違いがみられ、学力水準別ではA・Bグループで、「学習計画書を定期的に配付して提出させている」、C・Dグループでは「テスト前の期間だけ学習計画書を配付して提出させている」が高い。

**Q** あなたまたは貴校では、生徒に対して学習計画を立てる指導をしていますか。

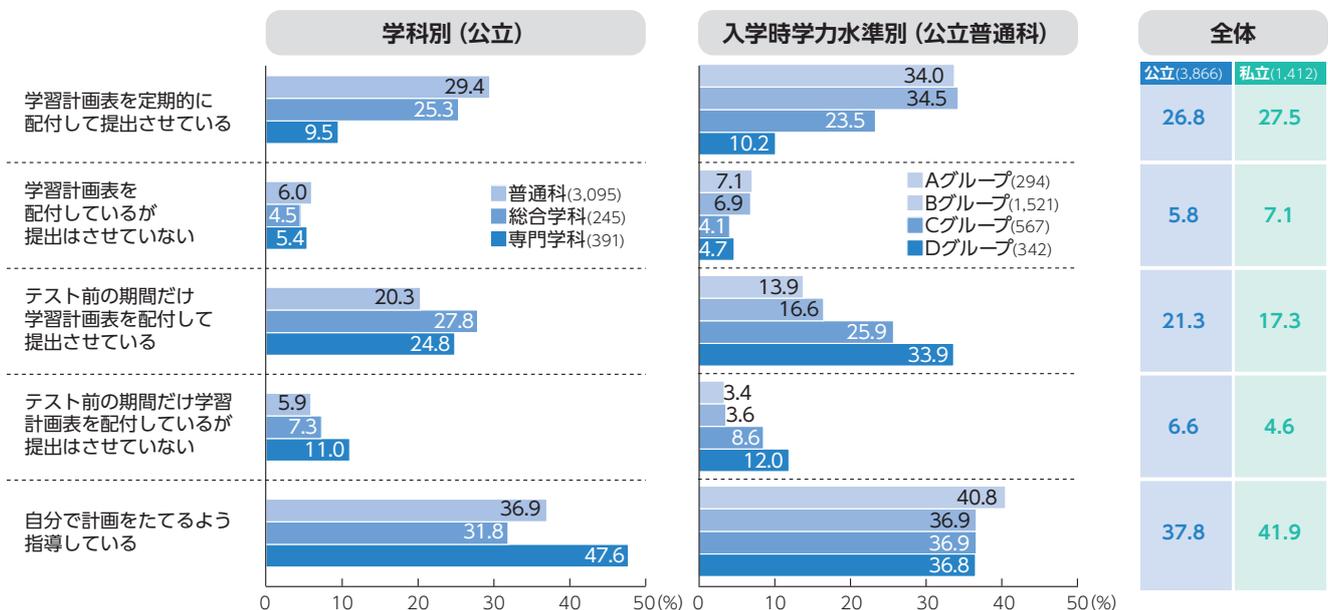
図3-3 学習計画の指導の有無(公立全体、学科別(公立)、入学時学力水準別(公立普通科)、私立全体) **高校** **教員**



注) 入学時学力水準は、「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績(評定平均)」に対する校長回答による。評定平均はAグループ4.5~5.0点、Bグループ3.5~4.0点、Cグループ3.0点、Dグループ1.0~2.5点として公立普通科について分類した。図3-4も同じ。

**Q** (「はい」(指導をしている)との回答者対象) どのような指導をしていますか。あてはまる番号1つを選んでください。

図3-4 学習計画の指導内容(学科別(公立)、入学時学力水準別(公立普通科)、公立・私立全体) **高校** **教員**



注1) 学習計画の指導の有無について「はい」と回答した教員を対象。注2) 無回答・不明は省略した。

# ④ グローバル化に向けた取り組み

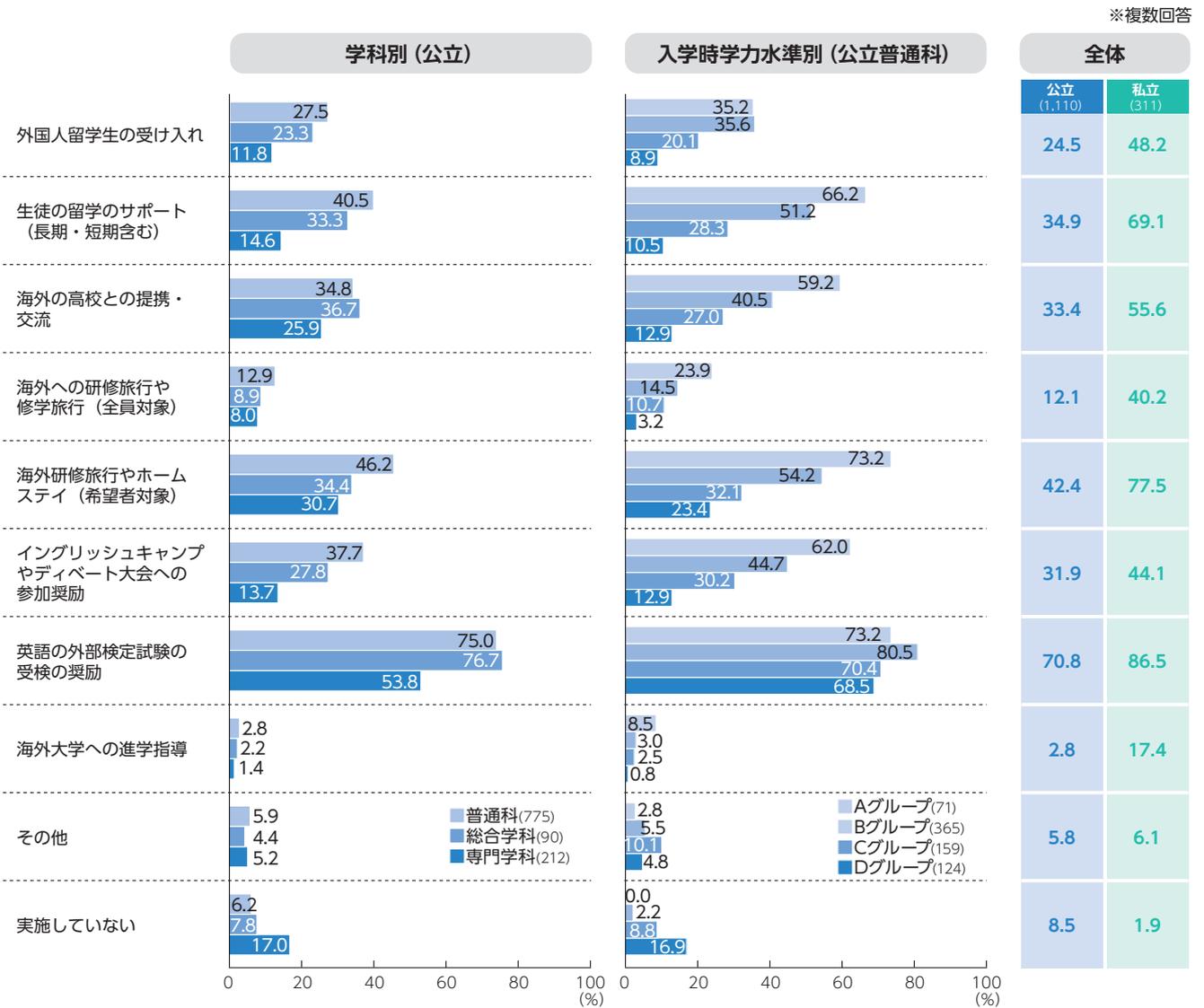
## 4-1 グローバル化への対応

公立に比べ私立、公立の中では普通科、公立の普通科では学力の高い学校ほど、取り組みは盛んである。

公立に比べ私立の方がグローバル化に向けた取り組みが行われている。公立と私立で特に差が大きいのは、「海外研修旅行やホームステイ」の35.1ポイント差であった。公立の学科別にみると普通科が比較的多く取り組みを行っており、また、公立普通科の入学時学力水準別にみると、「生徒の留学のサポート」「海外の高校との提携・交流」「海外研修旅行やホームステイ(希望者対象)」「イングリッシュキャンプやディベート大会への参加奨励」に大きな差がみられた。

**Q** 貴校では、教育のグローバル化に関連する次のような取り組みを行っていますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

図4-1 グローバル化の取り組み(学科別(公立)、入学時学力水準別(公立普通科)、公立・私立全体) **高校** **校長**



注)入学時学力水準は、「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績(評定平均)」に対する校長回答による。評定平均はAグループ4.5~5.0点、Bグループ3.5~4.0点、Cグループ3.0点、Dグループ1.0~2.5点として公立普通科について分類した。

3  
4  
家庭学習の指導／グローバル化に向けた取り組み

## 5-1 進路指導

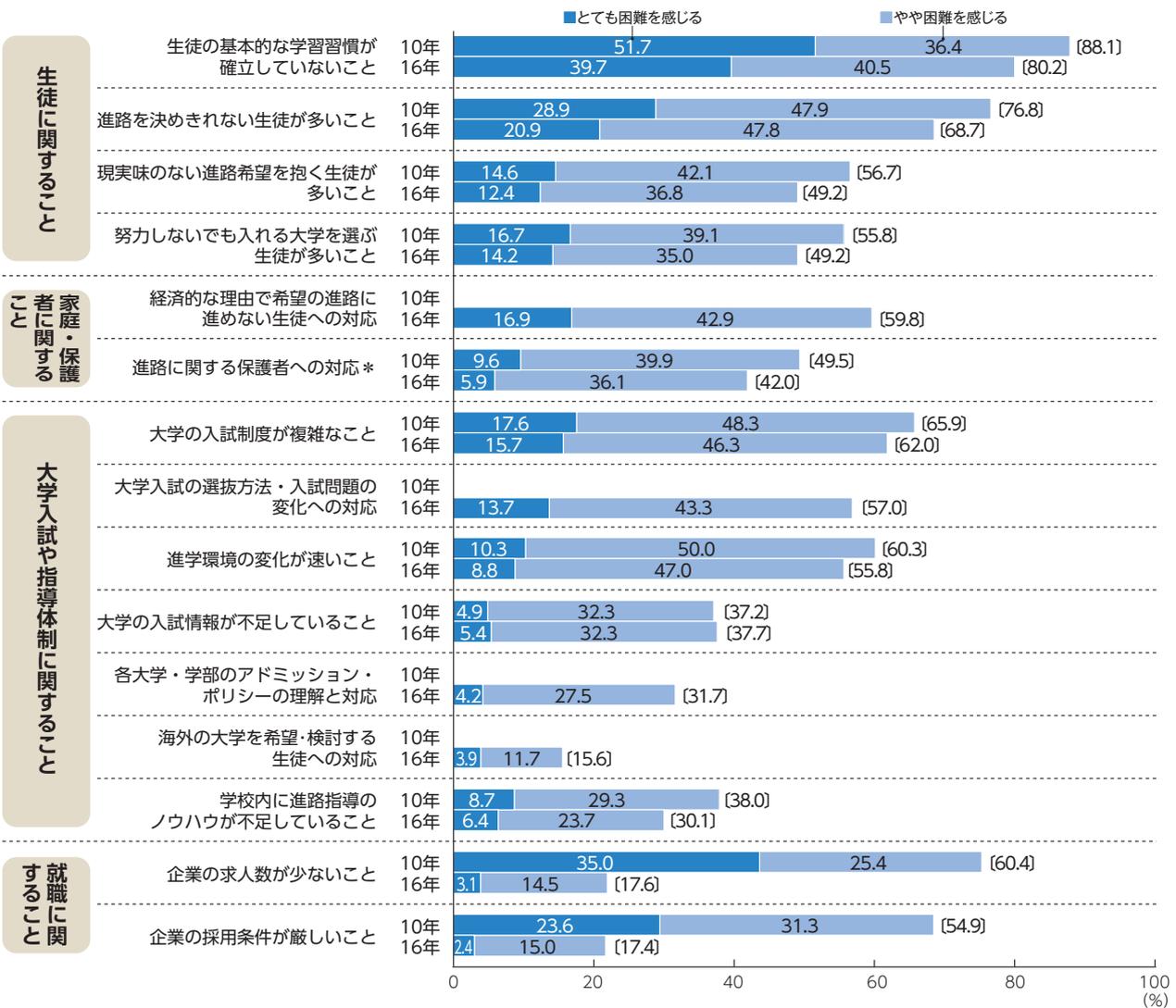
### 悩みのトップは「学習習慣の未確立」で8割。

進路指導の悩みとして、もっとも高いのは「生徒の基本的な学習習慣が確立していないこと」で80.2%であった。経年でみると、就職環境の変化を反映して、企業の求人数や採用条件といった就職に関する項目について困難を感じる割合が10年比で大きく減少している。

Q

生徒の進路指導を行う上で、次のようなことに対してどれくらい困難を感じますか。

図5-1 進路指導の悩み(経年比較〔公立全体〕) **高校** **教員**



注1) ( )内は「とても困難を感じる」+「やや困難を感じる」の%。

注2) 選択肢は「とても困難を感じる」「やや困難を感じる」「あまり困難を感じない」「まったく困難を感じない」「該当しない・わからない」の5択。

注3) \*は10年では「進路に関する保護者への対応が必要なこと」としてたずねている。

## 学力上位層の学校では、10年比で学習習慣に関する悩みが改善傾向。

悩みを入学時学力水準別にみると、Aグループでは、「大学の入試制度が複雑なこと」「進学環境の変化が速いこと」など大学入試に関することが高いが、C・Dグループでは、「生徒の基本的な学習習慣が確立していないこと」「進路を決めきれない生徒が多いこと」など生徒に起因する悩みが高くなっている(表5-1)。

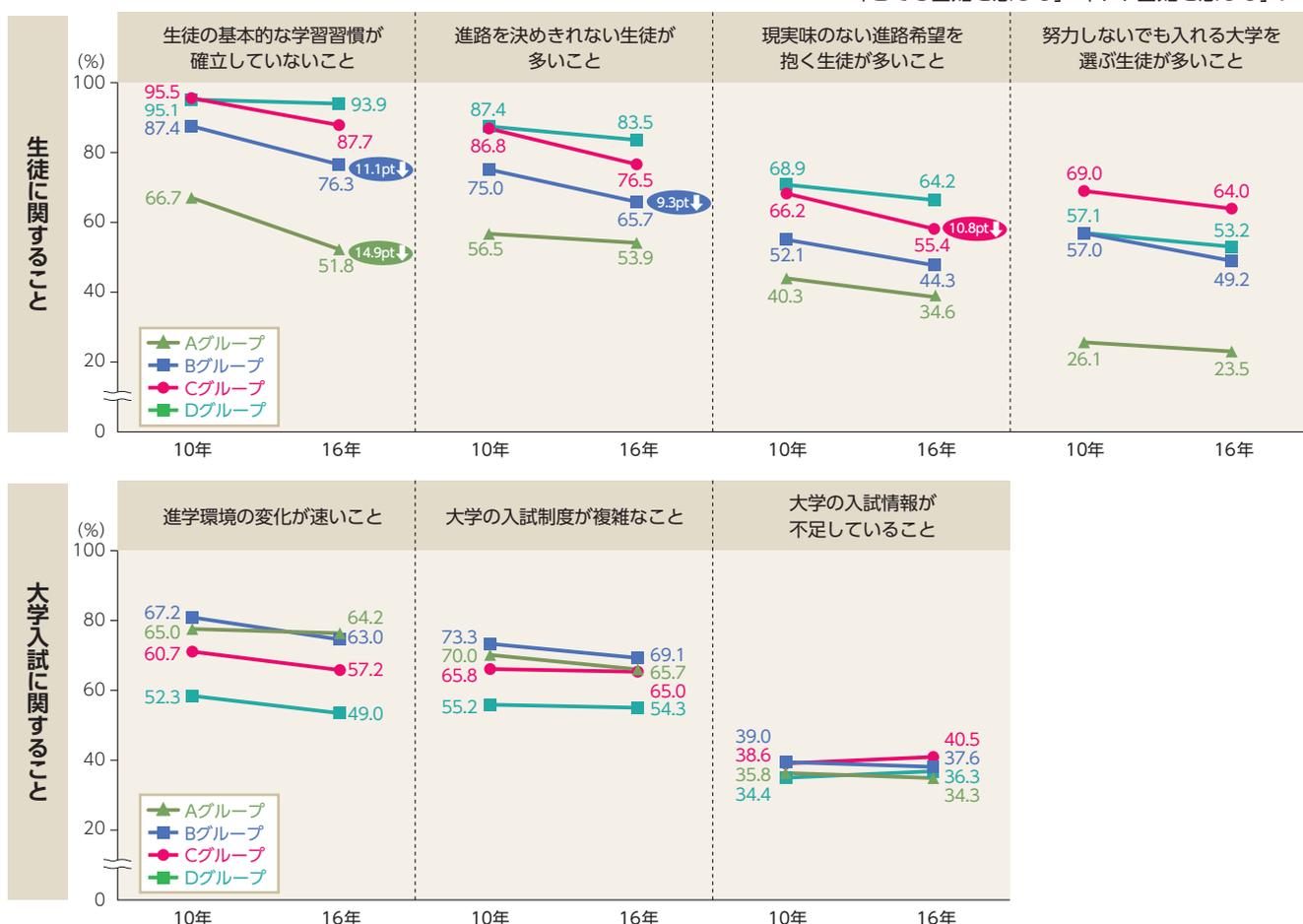
さらに、入学時学力水準別に経年変化をみると、「生徒の基本的な学習習慣が確立していないこと」はA・Bグループで10ポイント以上改善し、「進路を決めきれない生徒が多いこと」はBグループで9.3ポイント、「現実味のない進路希望を抱く生徒が多いこと」はCグループで10.8ポイント改善している。一方、大学入試制度など環境面に関することは、グループ別に変化の違いはあまりみられていない(図5-2)。

表5-1 進路指導の悩み(入学時学力水準別〔公立普通科〕・上位3項目) **高校** **教員**  
 「とても困難を感じる」+「やや困難を感じる」の%

	Aグループ(382)		Bグループ(2,048)		Cグループ(971)		Dグループ(739)	
1	大学の入試制度が複雑なこと	65.7	生徒の基本的な学習習慣が確立していないこと	76.3	生徒の基本的な学習習慣が確立していないこと	87.7	生徒の基本的な学習習慣が確立していないこと	93.9
2	進学環境の変化が速いこと	64.2	大学の入試制度が複雑なこと	69.1	進路を決めきれない生徒が多いこと	76.5	進路を決めきれない生徒が多いこと	83.5
3	大学入試の選抜方法・入試問題の変化への対応	61.0	進路を決めきれない生徒が多いこと	65.7	経済的な理由で希望の進路に進めない生徒への対応	68.6	経済的な理由で希望の進路に進めない生徒への対応	78.1

注)入学時学力水準は、「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績(評定平均)」に対する校長回答による。評定平均はAグループ4.5~5.0点、Bグループ3.5~4.0点、Cグループ3.0点、Dグループ1.0~2.5点として公立普通科について分類した。

図5-2 進路指導の悩み(経年比較(入学時学力水準別〔公立普通科〕)・7項目) **高校** **教員**  
 「とても困難を感じる」+「やや困難を感じる」の%



注1)入学時学力水準は、「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績(評定平均)」に対する校長回答による。評定平均はAグループ4.5~5.0点、Bグループ3.5~4.0点、Cグループ3.0点、Dグループ1.0~2.5点として公立普通科について分類した。

注2) 00.0pt↑ 00.0pt↓ は10年調査比で10ポイント以上の増減のあることを表す。

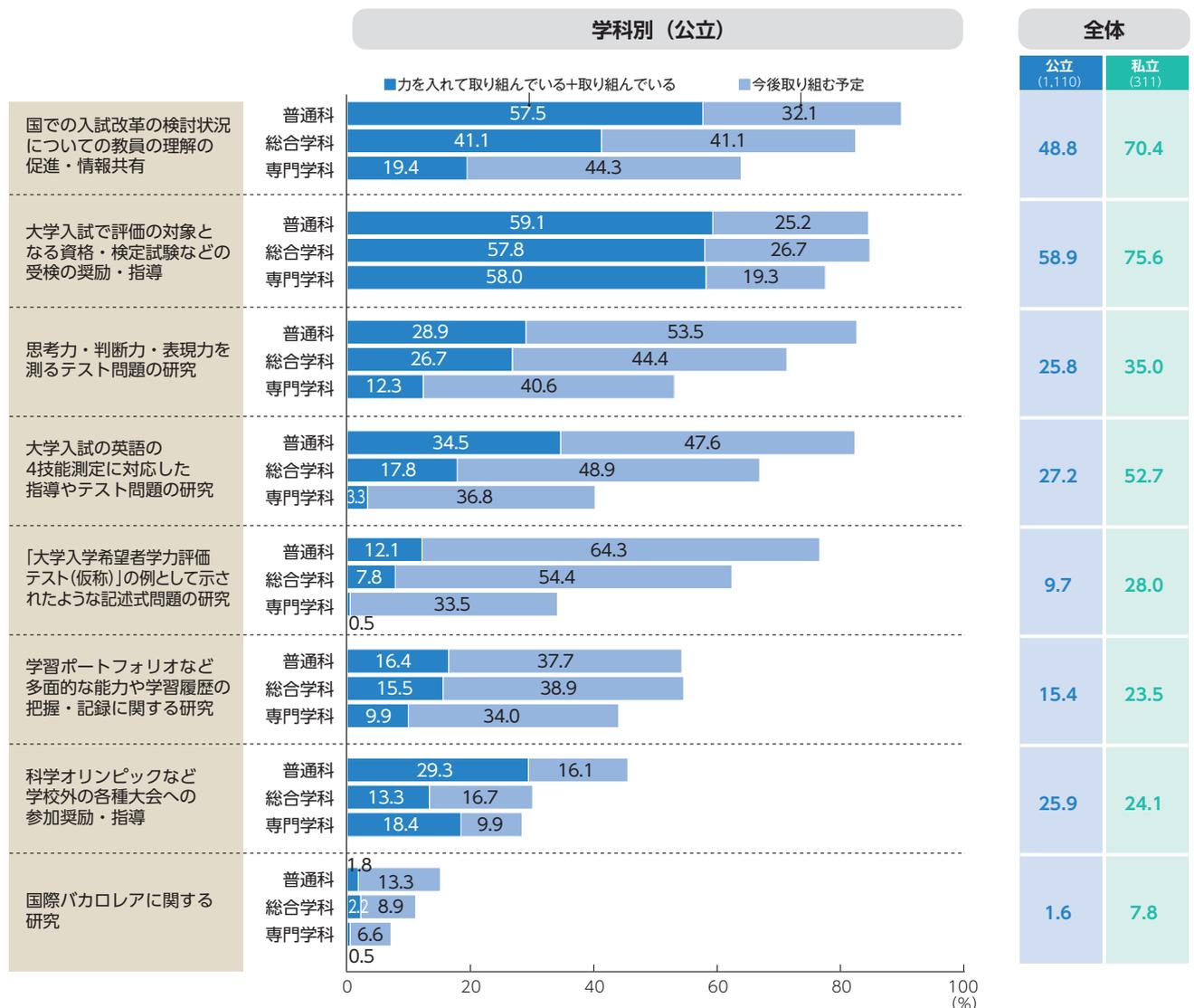
## 5-2 大学入試改革

### 公立普通科の3分の1、私立の半数が、大学入試の英語の4技能測定への対応を始めている。

大学入試改革への対応状況について、公立普通科の6割弱が「国での入試改革の検討状況についての教員の理解の促進・情報共有」に取り組んでおり、34.5%が「大学入試の英語の4技能測定に対応した指導やテスト問題の研究」に、28.9%が「思考力・判断力・表現力を測るテスト問題の研究」に既に取り組んでいると回答している。また、「『大学入学希望者学力評価テスト(仮称)』の例として示されたような記述式問題の研究」に取り組んでいるのは1割強であるが、「今後取り組む予定」は64.3%と高く、方向性が具体的にわかり次第動き始めそうだ。一方、私立は公立よりもすでに全般に取り組んでいる割合が高くなっている。

**Q** 貴校では、大学入試改革に関連した次のようなことを行っていますか。

図5-3 大学入試改革への対応状況(学科別〔公立〕、公立・私立全体) **高校** **校長**



注1) サンプル数は、普通科775名、総合学科90名、専門学科212名。

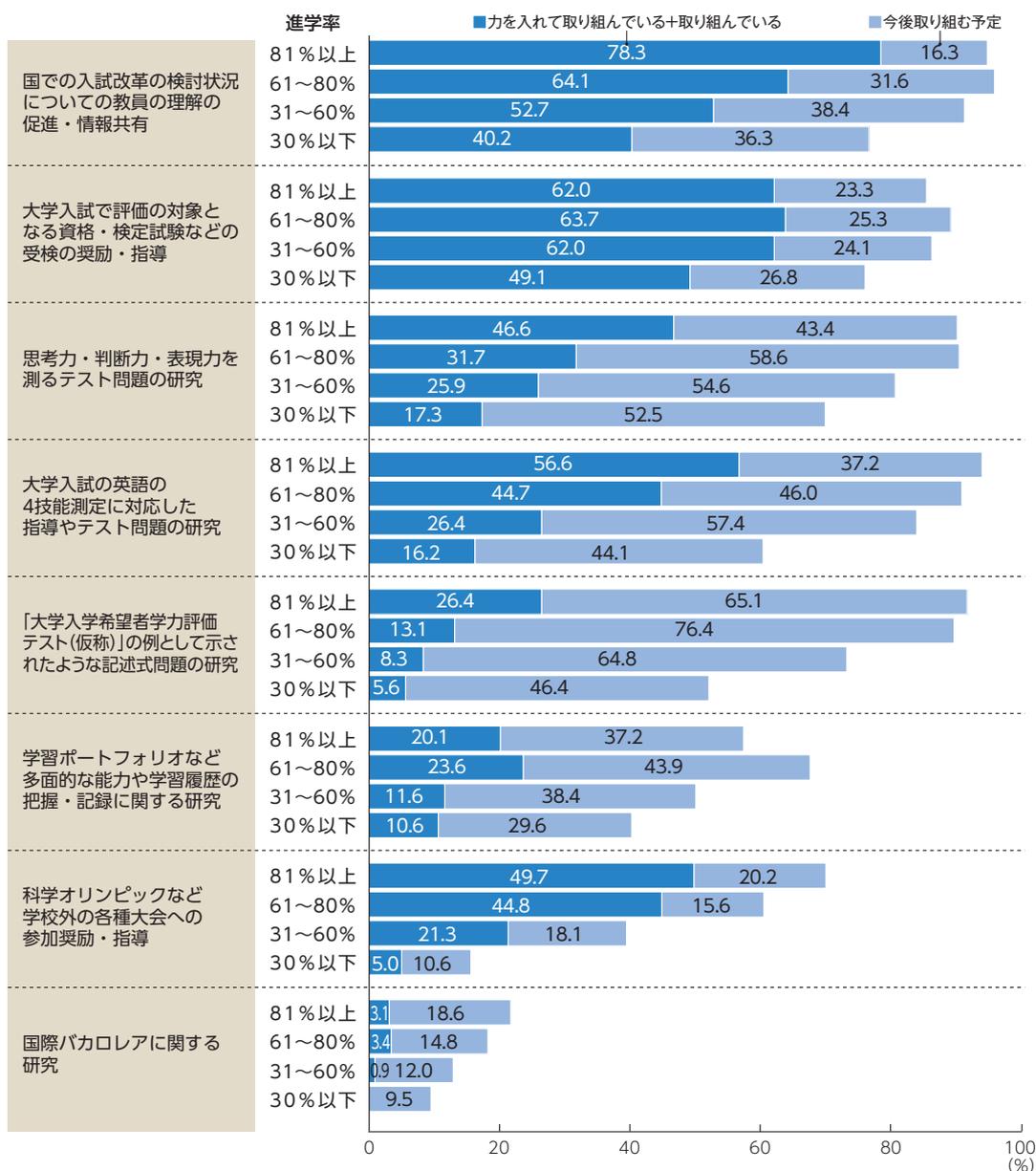
注2) 選択肢は、「力を入れて取り組んでいる」「取り組んでいる」「今後取り組む予定」「取り組んでおらず、予定もない・決まってない」の4択。

注) 表は「力を入れて取り組んでいる+取り組んでいる」「今後取り組む予定」の割合を示している。

## 四年制大学進学率が8割を超える学校の約半数が「思考力・判断力・表現力を測るテスト問題の研究」に取り組んでいると回答。

公立普通科について各高校の四年制大学進学率別にみると、進学率が高いほど入試改革への対応に取り組んでおり、「国での入試改革の検討状況についての教員の理解の促進・情報共有」や「思考力・判断力・表現力を測るテスト問題の研究」「大学入試の英語の4技能測定に対応した指導やテスト問題の研究」「記述式問題の研究」については、進学率別に取り組み度合いに違いが大きい。進学率「81%以上」の高校では、「思考力・判断力・表現力を測るテスト問題の研究」に約半数が、また「記述式問題の研究」にも4分の1が既に取り組んでいる。

図5-4 大学入試改革への対応状況(四年制大学進学率別〔公立普通科〕) 高校 校長



注1) 四年制大学進学率は、「昨年度の進路別の人数割合(現役生のみ)」に対する校長の回答に基づく。  
 注2) サンプル数は、四年制大学進学率が81%以上: 129名、61~80%: 237名、31~60%: 216名、30%以下: 179名。  
 注3) 選択肢は、「力を入れて取り組んでいる」「取り組んでいる」「今後取り組む予定」「取り組んでおらず、予定もない・決まってない」の4択。

## 6-1 校内研修

「アクティブ・ラーニング」を校内研修として行っている高校は5割を超える。

校内研修の回数を経年でみると、ほとんど変化はみられなかった。校内研修領域をたずねたところ、10年に比べ、「教科指導」を選択した割合は少し増え、5割を超える。また、今回、追加項目である「アクティブ・ラーニング」は5割を超え、「教科指導」に次ぎ2位となる。公私別にみると、私立が公立より10ポイント以上高い項目は「ICT機器の活用」(14.9ポイント差)である。一方、公立が私立より10ポイント以上高いのは「特別支援教育」(29.0ポイント差)、「人権教育」(16.6ポイント差)、「主権者教育」(11.4ポイント差)である。公立が私立かによって、関心がある領域が異なることが分かった。

**Q** 今年度の校内研修の回数を教えてください(予定も含みます)。

図6-1 校内研修の回数(予定を含む)(経年比較[公立全体]) **高校** **校長**



注)回数は数字を直接記入してもらったもの。平均回数は、無回答・不明を除いて算出している。

**Q** 今年度、どのような領域について校内研修を行いますか(予定も含みます)。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

表6-1 校内研修の領域別実施率(予定を含む)(経年比較[公立全体)、学科別[公立)、入学時学力水準別[公立普通科)、私立全体) **高校** **校長**

※複数回答 (%)

	公立								私立	
	10年全体 (830)	16年全体 (1,110)	普通科 全体 (775)	入学時学力水準別				総合学科 全体 (90)		専門学科 全体 (212)
				Aグループ (71)	Bグループ (365)	Cグループ (159)	Dグループ (124)			
教科指導	49.0	53.6	54.6	62.0	52.9	52.2	59.7	54.4	47.6	52.4
アクティブ・ラーニング (主体的・協働的な学習)		52.3	54.8	63.4	59.5	43.4	46.8	55.6	41.5	54.3
進路指導	46.4	46.4	52.9	69.0	58.9	43.4	37.9	37.8	25.5	45.0
特別支援教育	46.2	45.4	43.9	25.4	38.6	45.3	65.3	45.6	53.3	16.4
生徒指導	45.7	43.3	40.5	32.4	37.8	39.0	53.2	37.8	56.1	48.6
人権教育		42.3	40.1	42.3	41.9	42.1	32.3	44.4	51.4	25.7
ICT機器の活用	28.3	26.9	26.3	26.8	26.6	27.0	26.6	24.4	31.1	41.8
主権者教育		22.3	21.4	18.3	24.9	16.4	17.7	24.4	25.9	10.9
探究学習・課題解決型学習		10.8	11.4	33.8	12.3	6.3	4.0	13.3	7.1	18.6
次期学習指導要領*	26.5	10.0	10.8	18.3	11.2	10.1	8.1	15.6	5.7	18.6
中学校との連携	8.9	5.4	5.9	1.4	6.0	6.3	8.9	7.8	2.8	4.5
総合的な学習の時間	7.1	5.0	5.3	5.6	5.2	6.9	4.0	13.3	0.9	4.8
大学との連携	6.0	4.7	5.2	8.5	6.3	1.9	4.0	3.3	2.8	10.9
道徳	10.6	3.4	2.8	1.4	2.5	3.8	4.0	3.3	5.7	5.5

注1)項目は16年全体の値の高い順に並べている。注2)「その他」は省略している。

注3)■は項目別にもっとも高いもの、■はもっとも低いものを表す。注4)\*は10年では、「新学習指導要領」とたずねている。

注5)入学時学力水準は、「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績(評定平均)」に対する校長回答による。評定平均はAグループ: 4.5~5.0点、Bグループ: 3.5~4.0点、Cグループ: 3.0点、Dグループ: 1.0~2.5点として公立普通科について分類した。

## 6-2 指導力向上

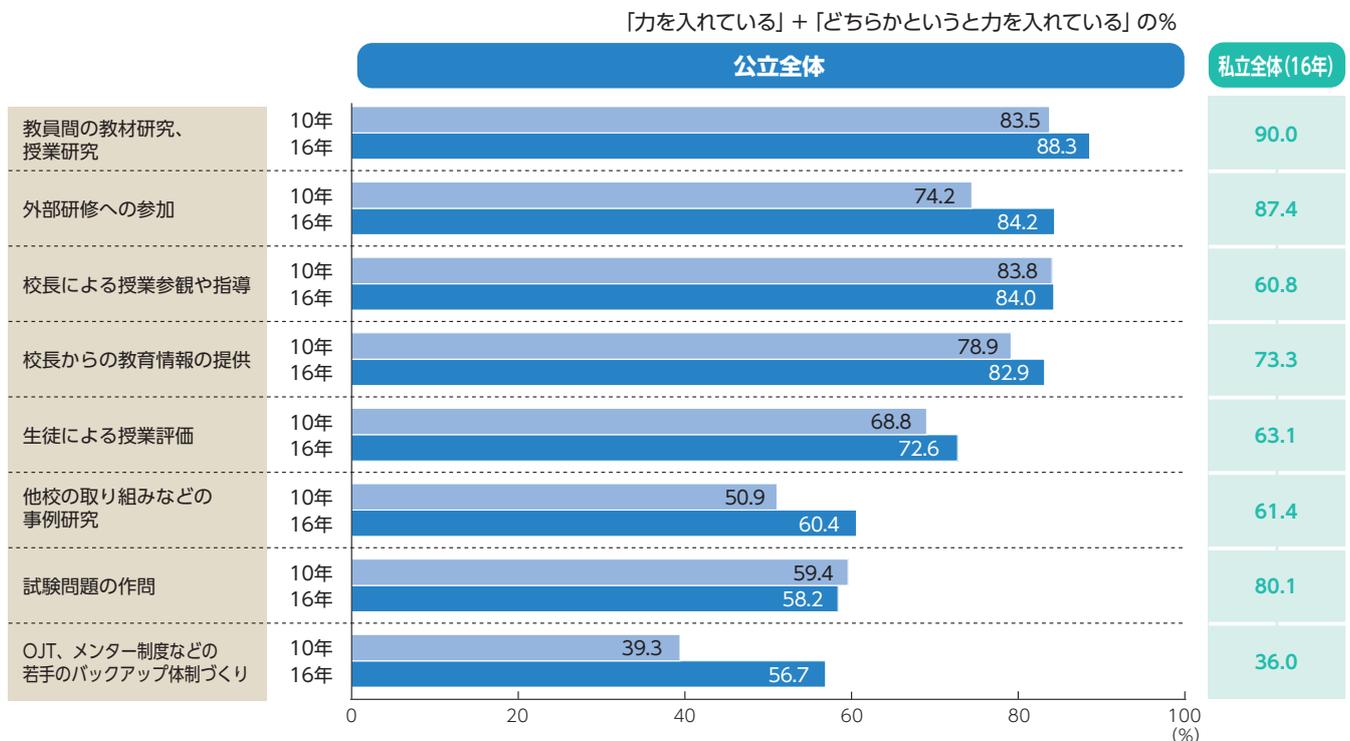
### 「若手のバックアップ体制づくり」に力を入れている高校は56.7%。

教員の指導力向上のため、「OJT、メンター制度などの若手のバックアップ体制づくり」に「力を入れている」（「力を入れている」+「どちらかという力を入れている」と回答した高校は10年の39.3%から16年の56.7%と、17ポイント以上増加した。多くの項目で10年に比べ増加している。教員の指導力を高めるために様々な工夫がされていることがうかがえる。また、「OJT、メンター制度などの若手のバックアップ体制づくり」については、30歳未満の若手教員の比率が高い高校ほど、「力を入れている」と回答した割合が高いことが分かった。

Q

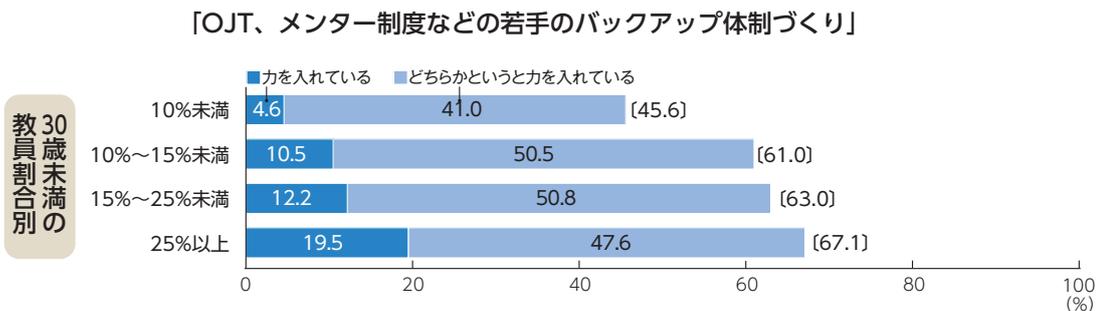
貴校では、教員の指導力を向上させるために、次のことにどれくらい力を入れていますか。

図6-2 教員の指導力向上のため、力を入れていること（経年比較〔公立全体、私立全体〕） **高校** **校長**



注) 選択肢は、「力を入れている」「どちらかという力を入れている」「どちらかという力を入れない」「力を入れない」「実施していない」の5択。

図6-3 教員の指導力向上のため、力を入れていること（30歳未満の教員割合別〔公立〕） **高校** **校長**



注1) 学校ごとに本務教員に占める30歳未満の教員の比率を算出し、「10%未満」(368名)、「10%～15%未満」(277名)、「15%～25%未満」(295名)、「25%以上」(82名)の4つに区分した。

注2) ( )内は「力を入れている」+「どちらかという力を入れている」の%。

6

指導力向上

# ⑦ 教員の勤務実態と意識

## 7-1 教員の勤務時間

勤務時間は長時間化している。

学校にいる時間は小・中・高校教員のいずれも11時間30分以上。

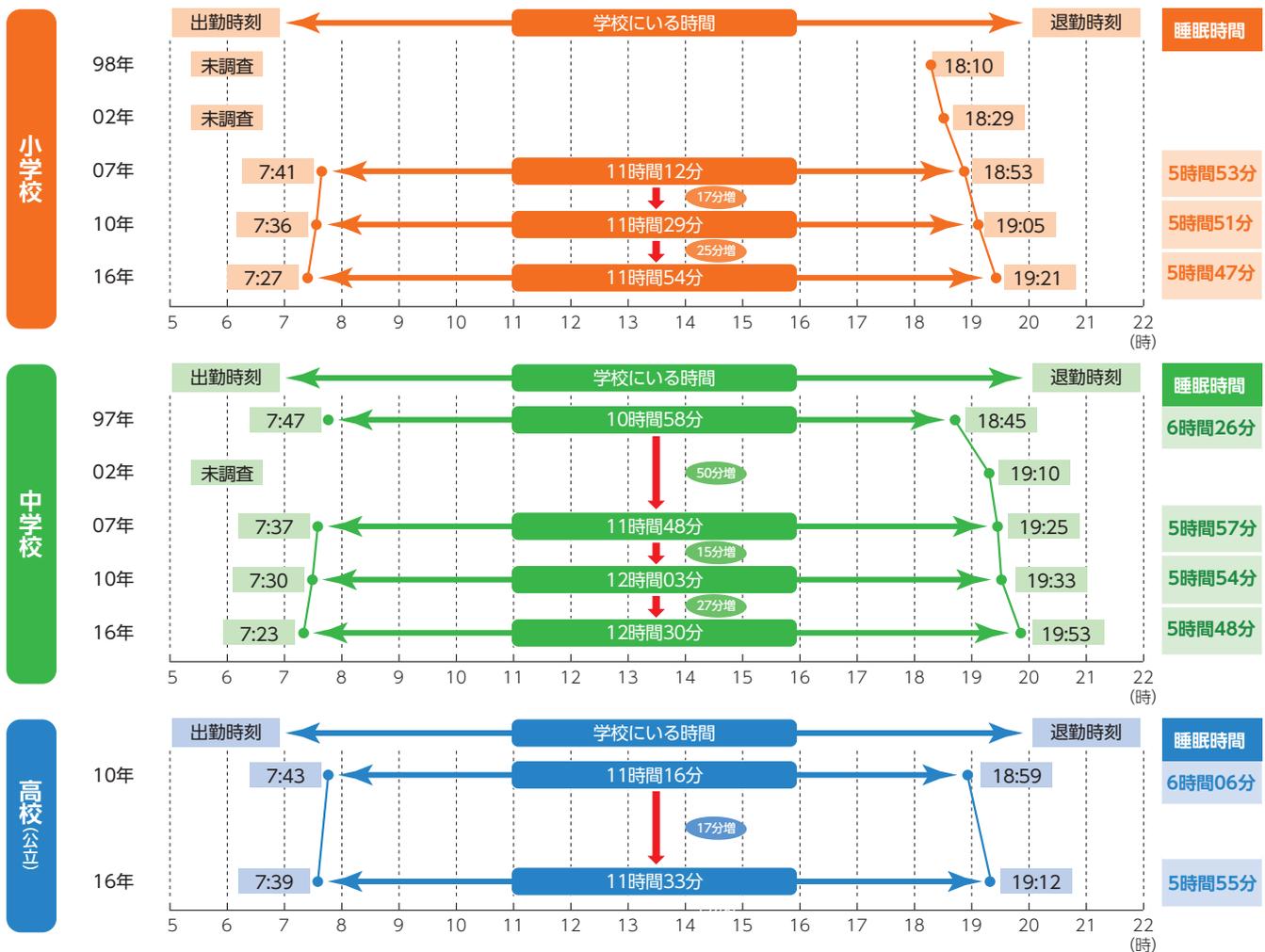
小学校教員の学校にいる時間は11時間54分で10年よりも25分増加、中学校教員は12時間30分で27分の増加、高校教員は11時間33分で17分の増加となっている。小・中・高校教員のいずれも、勤務時間は増加傾向にある。また、年齢層別にみると、若手教員のほうがベテラン教員に比べ、学校にいる時間は1時間以上長い。さらに、同じ年齢区分で経年で比較すると、どの年齢層でも出勤時刻は早まり、退勤時刻は遅くなっていることから、若年齢化だけが影響でなく、多忙化は進んでいるといえる。

Q

授業がある平均的な1日についてうかがいます。

図7-1 出勤時刻・退勤時刻・学校にいる時間・睡眠時間(平均時間、経年比較)

小学校 中学校 高校 教員



注1)「出勤時刻」は、「出勤時刻(学校に着く時刻)は、だいたい午前何時ごろですか」への回答を、「6時以前」を5時30分、「8時半以降」を8時30分のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を算出した。07年調査の「出勤時刻」は、「学校には、始業時刻の何分前に着きますか」への回答を、「始業5分前」を5分前、「それ以上前」を75分前のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を出し、8時15分を始業時刻と仮定して算出した(『教員勤務実態調査(小・中学校)報告書』2007参照)。

注2)「退勤時刻」は「5時以前」を4時30分、「10時以降」を10時のように、「睡眠時間」は「4時間以内」を4時間、「9時間以上」を9時間のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を算出した。「学校にいる時間」は、出勤時刻の平均から退勤時刻の平均までの時間を計算したもの。

表7-1 出勤時刻・退勤時刻・学校にいる時間(平均時間、経年比較(教員年齢別(公立全体))) **高校** **教員**

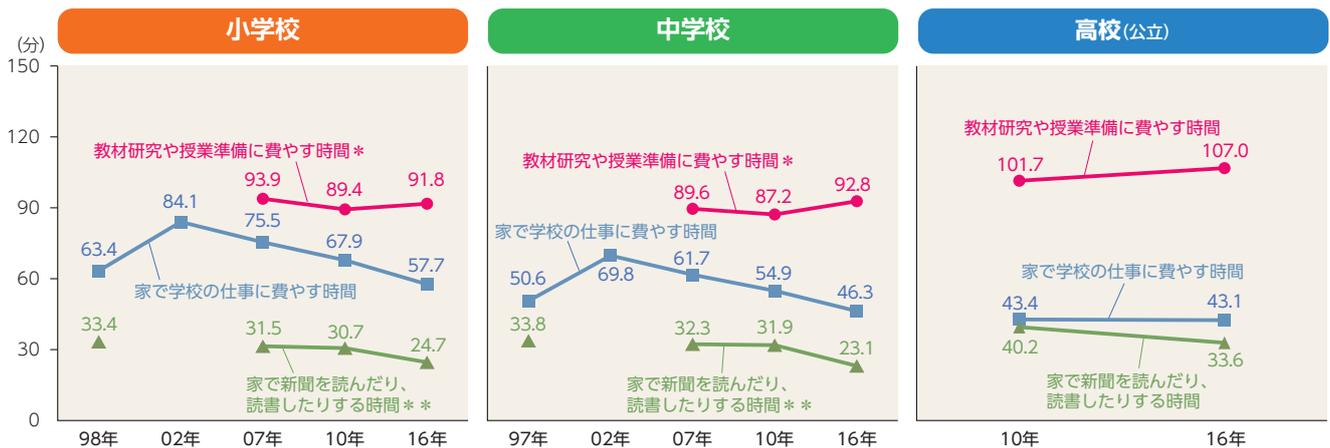
	調査年	25歳以下	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳
出勤時刻	10年	7:44	7:43	7:44	7:42	7:42
	16年	7:34	7:36	7:40	7:39	7:40
退勤時刻	10年	19:30	19:40	19:10	18:57	18:31
	16年	20:00	19:54	19:26	19:05	18:46
学校にいる時間	10年	11時間46分	11時間57分	11時間26分	11時間15分	10時間49分
	16年	12時間26分	12時間18分	11時間46分	11時間26分	11時間06分

注)「出勤時刻」「退勤時刻」「学校にいる時間」は、図7-1と同様に計算したもの。

## 「家で学校の仕事に費やす時間」は小・中学校教員とも減少傾向。

**Q** 授業がある平均的な1日についてうかがいます。

図7-2 平日の生活時間(平均時間、経年比較) **小学校** **中学校** **高校** **教員**



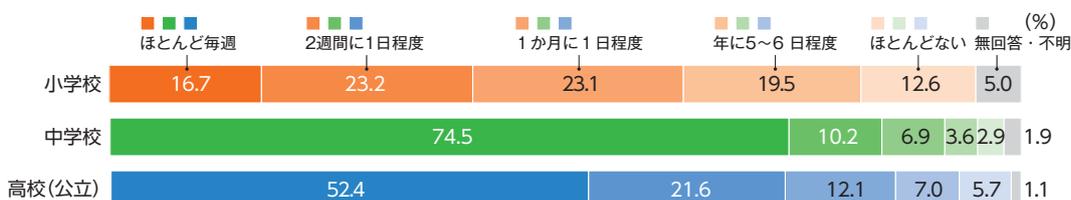
注1)「家で学校の仕事に費やす時間」「家で新聞を読んだり、読書したりする時間」「教材研究や授業準備に費やす時間(学校と家で行う時間の合計)」は、「ほとんどしない」を0分、「3時間以上」を180分のように置き換えて、無回答・不明を除いて平均を算出した。

注2) \*印は、小学校の98年調査、02年調査、中学校の97年調査、02年調査でたずねていない項目。\*\*印は、小・中学校の02年調査でたずねていない項目。

## 土日の出勤状況が「ほとんど毎週」が中学校で74.5%、高校で52.4%。

**Q** あなたは、どれくらいの頻度で土曜日または日曜日に出勤していますか。学校行事や部活動も含めてお答えください。

図7-3 土日の出勤状況 **小学校** **中学校** **高校** **教員**



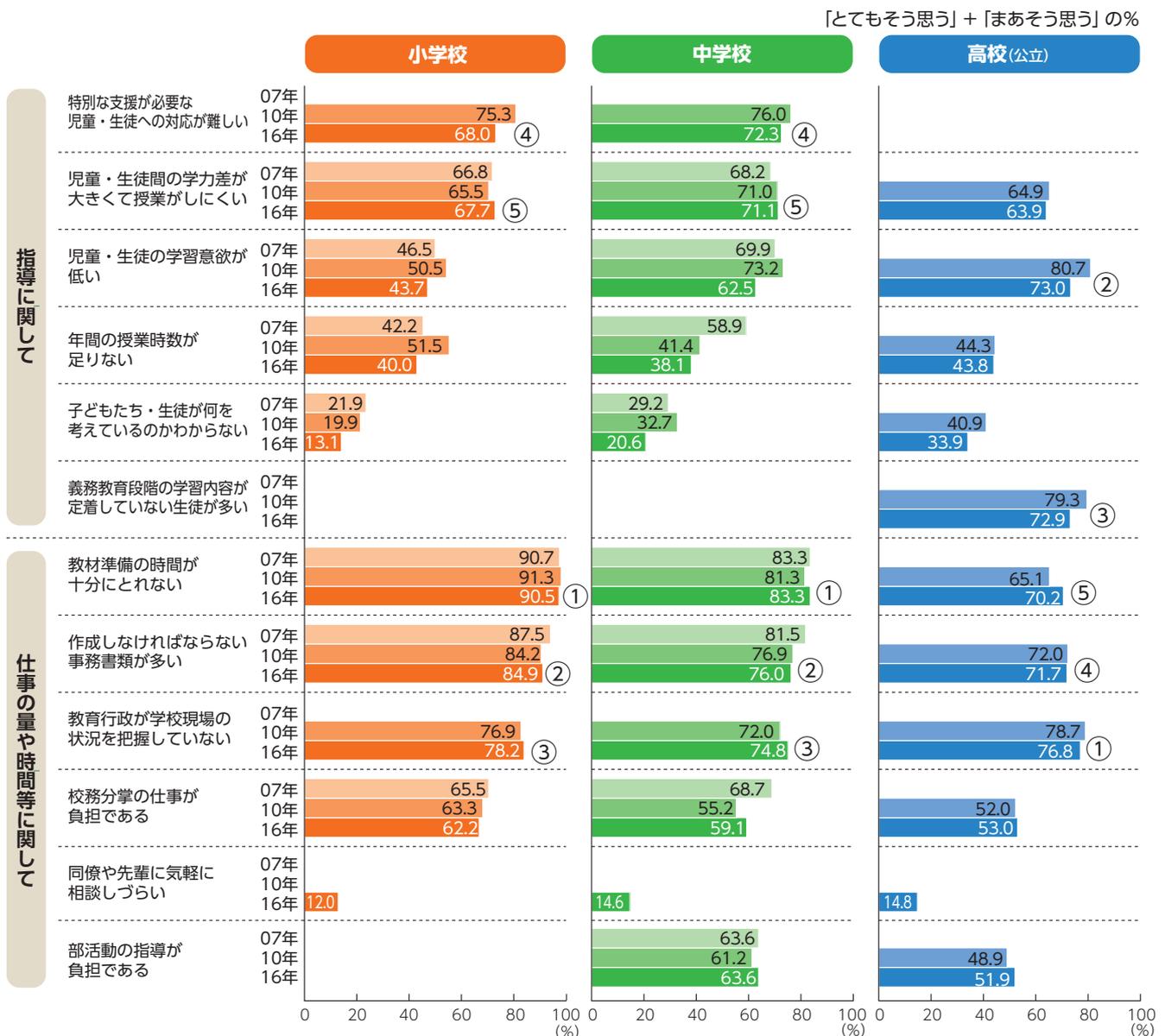
## 7-2 教員の悩み

10年と悩みの上位項目は変わらず、小・中学校では「教材準備の時間が十分にとれない」が目立つ。

小・中学校教員はともに、「教材準備の時間が十分にとれない」「作成しなければならない事務書類が多い」など日々の忙しさに関する悩みが上位にあがっており、この傾向は10年から変わっていない。一方、高校教員は、「教育行政が学校現場の状況を把握していない」がもっとも高く、次いで、「生徒の学習意欲が低い」「義務教育段階の学習内容が定着していない生徒が多い」が続く。

**Q** あなたは、次のような悩みをどれくらい感じていますか。

図7-4 教員の悩み(経年比較) **小学校** **中学校** **高校** **教員**



注) 学校段階別に上位5位までを①～⑤と表示している。

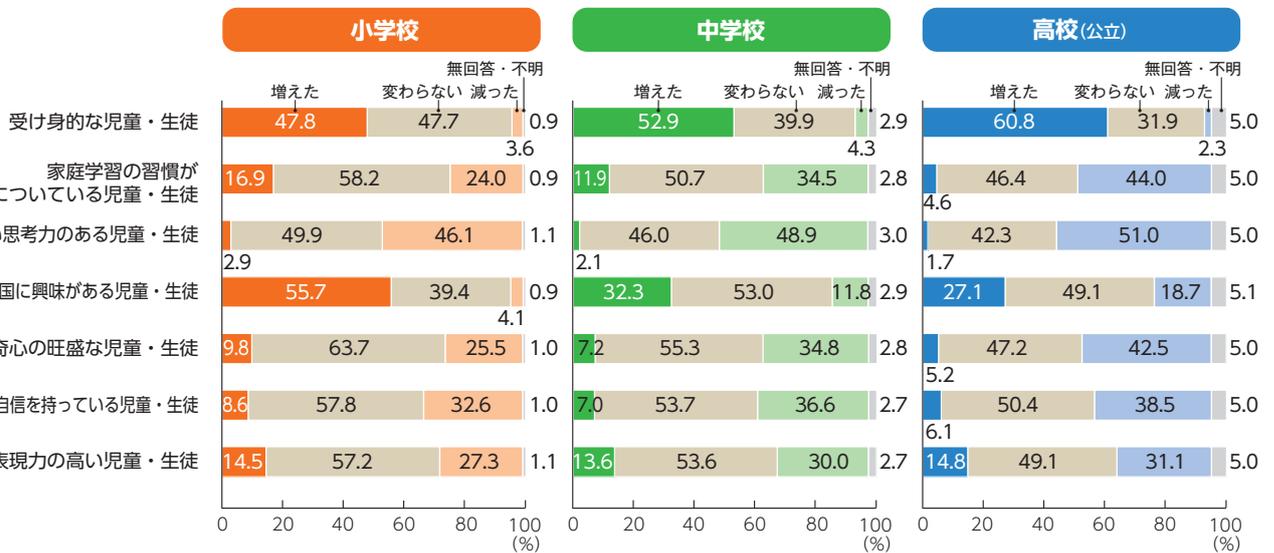
# 7-3 児童・生徒の様子・変化

## 小・中・高校とも受け身的な児童・生徒が増えたと感じている教員が多い。

教員に最近の児童・生徒に対する印象をたずねた結果では、「受け身的な児童・生徒」が増えたと感じている教員が小・中学校で5割前後、高校で6割にのぼる。また「粘り強い思考力のある児童・生徒」は小・中・高校とも5割程度が「減った」と感じている。次に、校長に学校の児童・生徒の状況についてたずねたところ、高校については「経済的に困難を抱えている生徒」の割合が「3～4割以上」が10年の15.4%から16年は19.0%と若干増加している。また、「義務教育段階の学習内容が十分定着していない生徒」も、「3～4割以上」が10年の25.0%から16年は28.4%と若干増えている。

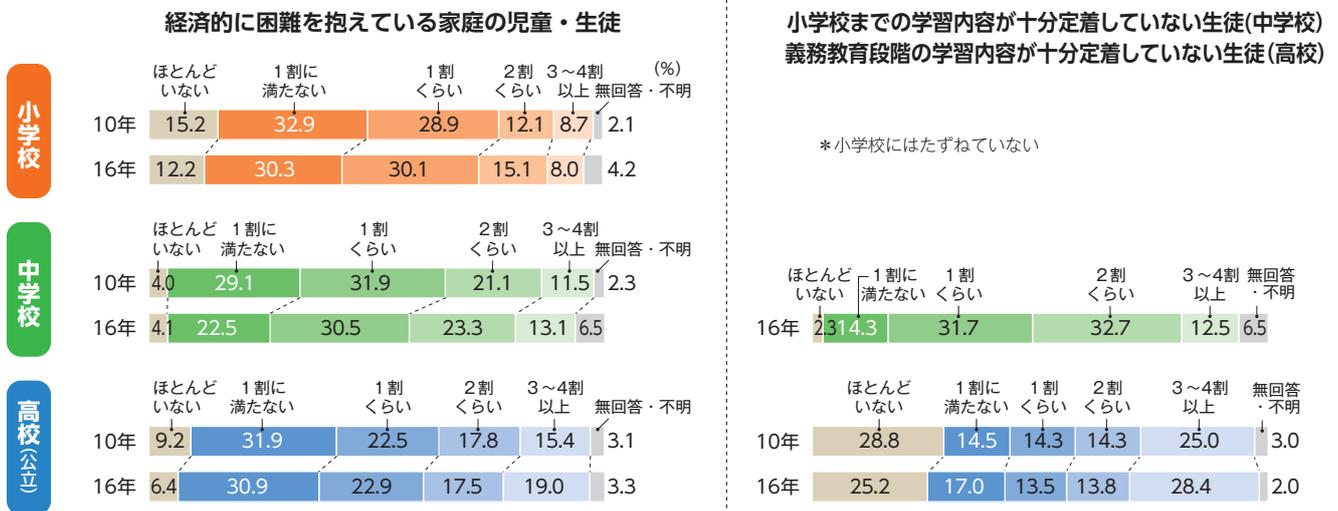
**Q** 数年前と比べて、最近の児童・生徒はどう変わってきていると思いますか。

図7-5 児童・生徒の変化 **小学校** **中学校** **高校** **教員**



**Q** 貴校には、次のような児童・生徒がどれくらいいますか。

図7-6 児童・生徒の状況 **小学校** **中学校** **高校** **校長**



注1)「3～4割以上」は、「3～4割くらい」と「5割以上」の合計値。  
 注2)中学校の「小学校までの学習内容が十分定着していない生徒」は10年はたずねていない。

7 教員の勤務実態と意識

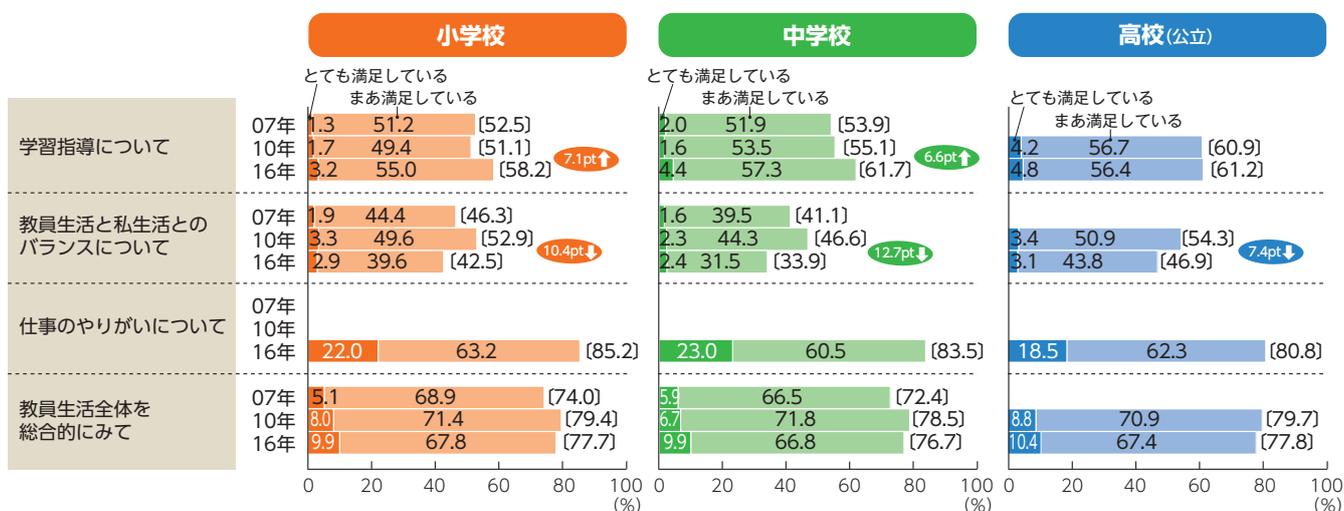
## 7-4 教員の満足度

### 「教員生活と私生活のバランス」は、10年と比べ小・中・高校教員のいずれも減少。

小・中学校教員ともに、「学習指導について」の満足度は10年と比べ、7ポイント程度高まった。一方、小・中・高校教員いずれも、「教員生活と私生活のバランスについて」は、10年比で7～12ポイント程度低くなった。さらに、高校教員について性別、年齢層別にみると、ベテラン層において男性教員に比べ女性教員の満足度が低い傾向がみられる。

**Q** あなたは、教員として、次のようなことにどれくらい満足していますか。

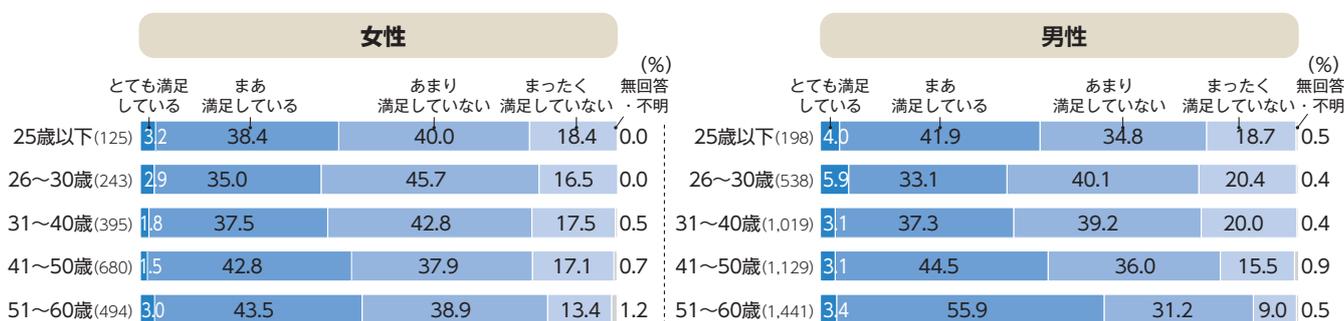
図7-7 教員としての満足度(経年比較) **小学校** **中学校** **高校** **教員**



注1) 00.0pt↑ 00.0pt↓ は10年調査比で5ポイント以上の増減のあることを示す。  
 注2) ( )内の値は「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

図7-8 教員生活と私生活のバランスの満足度(性別×教員年齢別(公立全体)) **高校** **教員**

#### 「教員生活と私生活とのバランスについて」



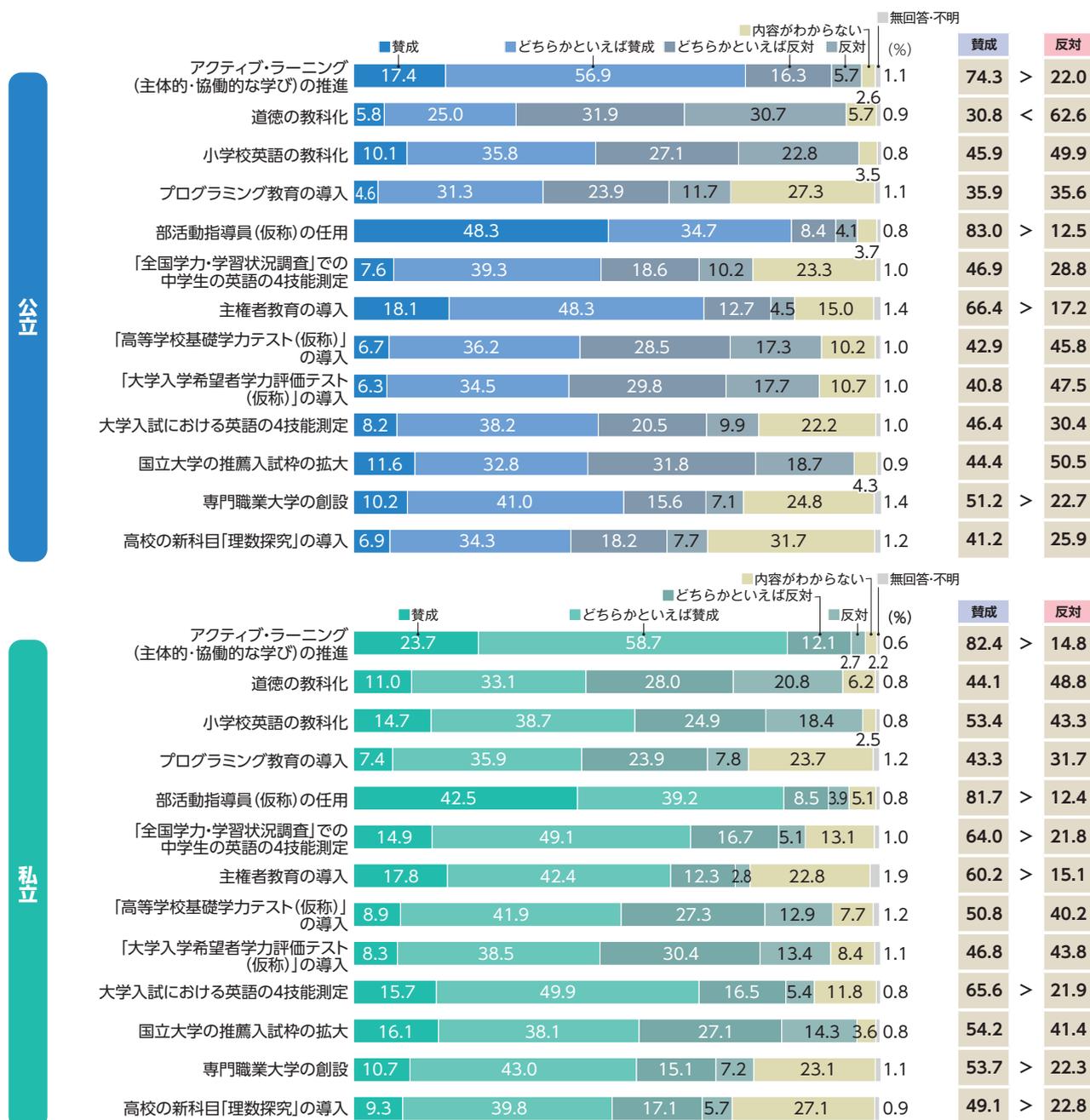
## 8 教育改革への賛否

「国立大学の推薦入試枠の拡大」については、公立では賛否が拮抗しているが、若干反対が多く、私立では賛成の方が多い。

現在、国が進めようとしている教育改革について賛否をたずねた。大学入試関連の項目をみると、「『高等学校基礎学力テスト』(仮称)の導入」「『大学入学希望者学力評価テスト(仮称)』の導入」「国立大学の推薦入試枠の拡大」は公立では賛否が拮抗しているが、反対の方が若干多い。私立では「『大学入学希望者学力評価テスト』の導入」はほぼ半々、「国立大学の推薦入試枠の拡大」は賛成の方が多い。「大学入試における英語の4技能測定」は公立・私立とも賛成の方が多くなってきている。また、「専門職業大学の創設」は賛成が多いものの、公立・私立とも4分の1が「内容がわからない」と答えている。

Q 現在、国が進めている(進めようとしている)次の教育改革や取り組みについて、うかがいます。

図8-1 教育改革の賛否(公立・私立全体) 高校 教員



注1) 右表の「賛成」は「賛成」+「どちらかといえば賛成」の%、「反対」は「反対」+「どちらかといえば反対」の%を表す。  
 注2) 右表の「>」「<」は「賛成」と「反対」で20ポイント以上の差があることを表す。

7  
8  
教員の勤務実態と意識／教育改革への賛否

# 教育環境の変化

年	教育トピックス	学習指導要領			
		内容／授業時数	小学校	中学校	高校
1997	● 第1回学習指導基本調査	[新しい学力観と個性尊重] ● 小学校低学年に「生活科」新設 ● 中学校で選択教科の履修幅の拡大 ● 高等学校で選択教科・科目の履修幅拡大 ● 授業時数 ◆ 小学校：5,785 時間 (小1：850 / 小2：910 / 小3：980 / 小4～6：1,015) ◆ 中学校：3,150 時間(中1～3：1,050)	89告示 学習指導要領	89告示 学習指導要領	89告示 学習指導要領
1998	● 小・中学校「学習指導要領」告示 ● 第2回学習指導基本調査				
1999	● 高等学校「学習指導要領」告示 ● 中高一貫教育制度化・公立で中高一貫校導入 ● 「学力低下論争」始まる				
2000	● 学校評議員制度の導入		移行措置期間	移行措置期間	
2001	● 不登校児童生徒数過去最多(13.9万人、小中学校) ● 「PISA2000」結果公表				移行措置期間
2002	● 文部科学省「確かな学力向上のための2002アピール～学びのすすめ」公表 ● SSH・SELHi 開始 ● 完全週5日制開始 ● 第3回学習指導基本調査	[生きる力育成とゆとりの確保] ● 授業時数の大幅削減と教育内容の厳選 ● 「総合的な学習の時間」の新設 ● 高等学校で「情報」の新設 ● 授業時数 ◆ 小学校：5,367 時間 (小1：782 / 小2：840 / 小3：910 / 小4～6：945) ◆ 中学校：2,940 時間(中1～3：980)	98告示 学習指導要領	98告示 学習指導要領	99告示 学習指導要領
2003	● 学習指導要領一部改正 → 指導要領を最低基準とし、学力重視強調				
2004	● 「PISA2003」結果公表 → 順位低下(PISAショック) ● 学校運営協議会制度導入				
2005	● 「読解力向上プログラム」策定				
2006	● 「教育基本法」改正 ● 高等学校で必履修科目の未履修問題				
2007	● 「全国学力・学習状況調査」開始 ● 教育三法改正 ● 「PISA2006」結果公表 ● 第4回学習指導基本調査				
2008	● 小・中学校「学習指導要領」告示 ● 「教育振興基本計画」策定				
2009	● 高等学校「学習指導要領」告示		移行措置期間	移行措置期間	
2010	● 「PISA2009」結果公表 → 改善傾向 ● 第5回学習指導基本調査				移行措置期間
2011	● 中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について」答申	[生きる力の継承・確かな学力の育成] ● 知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスの重視 ● 確かな学力確立のため必要な授業時数の確保 ● 小学校高学年の「外国語活動」導入 ● 言語活動の充実 ● 授業時数 ◆ 小学校：5,645 時間 (小1：850 / 小2：910 / 小3：945 / 小4～6：980) ◆ 中学校：3,045 時間(中1～3：1,015)	08告示 学習指導要領	08告示 学習指導要領	09告示 学習指導要領
2012	● 中教審「高大接続特別部会」で「大学入試改革」の議論始まる				
2013	● 教育再生実行会議設置 ● 「PISA2012」結果公表→回復				
2014	● SGH 開始				
2015	● 道徳の教科化の告示 (小学校で2018年、中学校で2019年から)				
2016	● 小中一貫教育制度化・義務教育学校の創設 ● 「高大接続システム改革会議」から最終報告公表 ● 中教審「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」答申 ● 「PISA2015」結果公表 ● 第6回学習指導基本調査				
2017	● 小・中学校「学習指導要領」告示				

## 第6回 学習指導基本調査

調査企画・分析メンバー

---

**耳塚寛明** お茶の水女子大学 教授(研究会代表)

**樋田大二郎** 青山学院大学 教授

**山田哲也** 一橋大学 教授

**西島 央** 首都大学東京 准教授

**小泉和義** ベネッセ教育総合研究所 副所長

**邵 勤風** ベネッセ教育総合研究所 主任研究員

**吉本真代** ベネッセ教育総合研究所 研究員

**佐藤徳紀** ベネッセ教育総合研究所 研究員

**沓澤 糸** ベネッセ教育総合研究所 特任研究員

---



**ベネッセ教育総合研究所**

〒206-0033 東京都多摩市落合 1-34

6BB002